川柳雜誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.305

昭和廿二年七月二十日第三種郵便物認可
昭和廿七年十月一日第二種郵便物認可
（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通巻三百五号

十月號

十月号目次

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介
川柳大学(4)……福田山雨楼…(一〇)
窓口談義……麻生路郎…(一二)
圓座句評……路郎・生々庵・春巣・古方・没食子……(一三)
三日議長の俳句……東野大八…(一四)
雑想……戸倉普天…(一五)
書名雑感……長野文庫…(一〇)
源義経(2)……富士野較馬…(一〇)
忘れもの……木村水堂…(一二)
一年生に帰る弁……吾郷玲人…(一七)
川柳今月の歴史……福田山雨楼編…(一二)
不朽洞の喫茶室……伍健・鮎美…(一二)
飛燕往来……(一九・二二)
★
不朽洞句帖……麻生路郎…(一二)
近作柳樽……麻生路郎選…(一四)
川柳塔……麻生路郎選…(一六)
同舟近詠……諸家…(一五)
一路集「涙「百貨店」」……正本水客選 丸山弓削平選…(一九)
各地柳壇……(二二)
柳界展望……(二〇)
川柳不朽洞会から……(二六)
編集局にて……(二六)

窓口談義

麻生路郎

二人のおばあちゃん画伯

八十一歳のおばあちゃん画伯の丸木スマさん絵三点が、上野の美術館で開かれている院展二回目の入選として話題になつているかと思えば落選二十六回の傷心にもめげず、ついに去年の廿七回目に日展入選の悲願をとげた六十七歳のおばあちゃん画伯矢島玉女さんが、九月廿三日から大阪の松坂屋で個展を開き、ズラリと問題の落選作画や入選後の作品を展観するそうだ。専門家の意見は別として、この二人の画家から他の画家一と云うよりも人間として教えられる点がありはしないか。スマさんは広島の原爆で夫に先立たれ退屈な毎日を過ごしていたが、「絵をお描になつたら」と嫁からすゝめられ「畑仕事よりしたことのないわしにそんな気のきいたことが出来るものですかい」とうけつけなかつたが、ついに絵筆を握ると、ボツ〳〵写生からはじめて、院展入選とまで漕ぎつけ、訪問記者に「まだ〳〵これからですわい」と云うハリキリ方である。スマさんからは幾ら晩学でもやつてやれぬことはないと云うことを立証出来るし、玉女さんからは根気よく続けさえすればいつかはある地点に到達すると云うことをうなづかされる。しかも二人とも、人生をヨリよく生きる点では生活に追われている商売画家よりどんなにか幸福感に満たされていることであろう。

世の中には生きるためにアクセクしている人が多い。退屈な毎日を過している人もかなりいる。そんな人達に川柳の作句をすゝめても、前者はヒマがないと云うてうけつけない。後者は、この年になつてはダメだと云うて手を出そうとしない。私に云わせればアクセクとしているその青白い溜息を、退屈なモヤ〳〵とした灰色の溜息を根気よく川柳に吐き出せば、真に生き甲斐ある人生を享楽する事が出来るのにと惜しまれてならない。私の周囲にも、おぢいちやん川柳家、おばあちやん川柳家が幾人かいて、日日を楽しんでいるのを見うけるが、作つても見ずに、この年になつて始めてもダメだと思つている人達はスマさんを、一寸投句して抜けないからと云つて悲観して匙を投げる作家は玉女さんを見習つて欲しいものである。

秋を歩く！

ハイキング割引チケット発売中

友ヶ島一周・大川峠・加太・淡輪廻遊・岩湧山・
寺ヶ池さやま遊園

お問合せは南海交通社へ
なんば TEL ㊲2931
梅田新道 〃 ㊲5019
和歌山 〃 和2321

南海電車

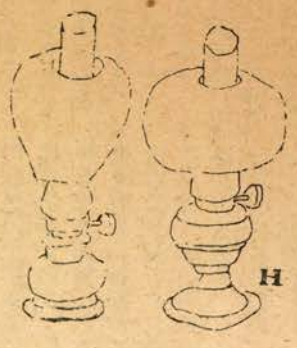
本社十月句会

時—十月四日（土）午後六時
處—大阪市天王寺区下寺町二丁目
（市電下寺町・日本橋三電停前下車）
於 光明寺
題—「再軍備」・「表具」・「口車」
柳話 麻生路郎
句評 水谷鮎美

来会歓迎・鉛筆持参

川柳雑誌社句會部

圓座句評



出席者

麻生路郎
中島生々庵
戸田古方
北川春巣
市場沒食子

沒食子＝今日は野介さんが急用で欠席されますので　これでメンバーが揃いましたから始めることに致しましょう。それでは古方さんからお願いします。

古　方＝豆秋さんには秋の句が多いので豆秋さんの句を沢山拾つたんですが……

「二百五十号川柳塔から」

秋の灯に讀みたい本が陳べられ　（豆秋）

豆秋さんらしさの淡い、平凡と言えばこれ位平凡な句もないと思われますが、私は此頃平凡な句に心を引かれるようになりました。選なんかしていても三才えは奇拔な句より平凡な句を持つて行きたくてしようがありません。豆秋さんはその深い体驗から涙の笑いと言うか、愛の川柳と言うか、そう云う句を沢山詠んで居られます例えば「二百八十三号川柳塔から」

恐い風だつたと雀しやべり

合ひ

猫抱いて窓から月を見せてやる

「二百九十五号川柳塔から以下二句」

秋空のきれいな雲を知らぬ牛

今晩は台風だとさコスモスよ

などが、それです。何とも云えない滋味の溢れた愛の川柳です。私は二十句ばかり豆秋さんの句を拔いてじつと眺め、何れを提句しようかと迷いましたが、そうした愛から拔け切つた様な、然し何処までも豆秋さんの匂いを出した初めの平凡な一句を出してみました。この句を豆秋さんの句として皆さんはどんな風に感じられますか。

春　巣＝「陳べられ」に陳列の陳を使われた事は、やはり本屋の本棚に陳列されている本を指した事と思われ、その点豆秋さんは大分考えて居られる様ですね。本屋に陳らべられて居る処を見て「読みたいけれど買えないなあ」と云う感じが出ているんじやないかと思います。

生々庵＝今、春巣さんが言われた通りに陳の字を持つて來た事に於いては豆秋さんの深いおもんばかりがある事は相像出來ますが、忌憚なく申して見ますと「秋の灯」と殊更に持つて來んでも豆秋さんの力では、もう少し豆秋さんのカラーが出やしなんだかと思われる訳ですが、何だか「秋の灯」の灯の字はやはり「燈下親しむ」と言う言葉があるので、自分の書齋の灯と云うように感じられるのですが、その点店屋の灯との区別がはつきりとせずに読者に交錯した感じを與えやしないかと思うのです。これは豆秋さんに伺つてみねば解りませんが、おそらく実感そのまゝ詠まれたものじやないかと想像します

沒食子＝この句は燈下　親しむの候と云う字句の影響が暗示されている様に思います。それが今古方さんの言われた平凡な句と云う様にとられるのであろうと思います。陳と云う字に就いては豆秋さんの細かい観点が挿入されて藝の細かい処を見せられたのではないでしようか。僕はやはり豆秋さんの匂いが出ている句だと思います。

路　郎＝僕は反対だね。皆の意見を覆えす様だが、第一豆秋君のカラーが出ていないと言うこと、それから馳け出しでも作れそうな平凡な句であると云うこと、古方君が平凡を愛すると云う観点からこの句を提出されたのも最もだと思う。然し古方君の言う平凡を愛すると云うことは平凡な句を愛すると云う文字通りの意味ではあるまい。生きる上

の平凡、そう云つたもゝの平凡を愛するのではあるまいか、句は平凡ではいけない。仮りに竹に雀が如何に適切な材料であつても、そうしたものを繰り返えせば決して感激は生れない。感激の生れない句は句としての存在價値がないと云つていゝだろう。それから陳と云う文字の使い方はあまりに当然である。

古　方＝私も先生のお話をおきゝして御尤もと思いますけど私、豆秋さんのうまい、豆秋さんらしい句の間に此の句を見出して晩年の鉄斉の絵でも見ている様な枯れたものを見つけ出した様に思うんですが思い過しでしようか。

路　郎＝豆秋君の本当の味は提出された句の様なものでないことは誰でも頷き得るであろう。此の句がそれ等の中から特に枯れた味を持つ句だと云う古方君の見方はアバタもエクボのくちであつて(笑声)少し惚れ込み過ぎてはいないか。豆秋君の一番やりぞこなつた句に感心しているんだからたまらん。

生々庵＝おそらく豆秋さん自身も傑作だとは思つていないでしよう。

浚食子＝然し豆秋さんらしい処がないこともない。

路　郎＝豆秋君の一番優れた処は飄逸さ、脱俗さにあつて四角のものを三角の目で見ているような処に味が出ているのであるが、一つやりぞこなうと誠に変哲もない句、馳け出しとあんまり差のない句となつていることが往々にしてある。これは亡くなつた浅井五葉が写生句の名手であつたが一歩やりぞこなうと、まるでゴムを嚙む様な句を作つたのと同じである。一線を限界に拍手と侮蔑と隣り合つた句を作る作家である。

生々庵＝一番初めに提出者の古方氏が云われた通りに豆秋さんには秋の句が非常に沢山目につきます。その中で私が一番引かれた句は。「二百五十一号川柳塔から」

桐落葉ハラ〳〵百圓札に見え

これがあんまり私の頭に光つておりますので実は古方氏の提句を意外にしたものです。

古　方＝私も今の「桐落葉」の句もチェックして來て居りますが、一番好きなのは先程申しました中にある「秋空のきれいな雲」と「猫抱いて」の二つを豆秋さんらしいと思つて居ります。

浚食子＝秋の句と言えば、すぐ思い出す句で、あまりにも有名ですが、

秋風の中で乞食に拜まれる

はさすがに豆秋さんの代表的な作品だけに、今更云々するのもおかしいですが、豆秋さんらしい人情味の溢れた、いい句だと思います。

春　巣＝豆秋さんと秋とで、昔感心しておつた句を今、思い出したのですが「二百七十号各地柳壇から」

ふらんすへ行きたし秋の背廣着て

この句は句会で背廣と云う題で路郎先生の選に天に拔けた事を覚えて居ります。終戰後の事で古背廣を詠んだ句が多かつた中にこの句が天に拔けて旨いもんだなあと思いました。

浚食子＝何だか豆秋論みたいになつてしまいましたが、此の辺で作者を変えて次に移ることに致しましよう生々庵さんどうぞ。

生々庵＝かほるさんの句で「二百二号川柳塔より」

十月の暑さを袖で煽がれる

如何にもかほるさんらしい和服姿が心斉橋の秋の陽照りの中に立つて扇子を持たぬので自分の袖で自分の顔を煽ぎながら立話をしている、かほるさんの姿が見える様でチェックした中でこの句を提出いたします。

古　方＝かほるさんの初期の句はよくは存じませんが島之内カラーの濃厚な、ひつこい様な句だつたと聞いていますが私の知つて以來のかほるさんは誠に淡々として所謂軽味の出た立派な生命ある句を遺していられますが、この句もその一つでありましよう。九月ともせずに十月の暑さと持つて來られた技巧には頭が下ります。

路　郎＝この句はかほる君の実感句であろう。前二者の批評で盡きている。これこそ古方君の言う枯れた句である。

生々庵＝これは煽がれると言うのは、自分の袖で煽いでいるのでしような、舞子か何かに袖で煽がれるのじやないと思うのだが……

路　郎＝自分の袖で煽いでいるんだね。かほる君の姿が目に浮んで來る様だ。十月と云う表現も確かにうまい。

浚食子＝

「八十二号川柳塔から」

つく〳〵と貧乏がながい秋の顔

（琴人）

琴人さんの晩年は必ずしも幸福でなかつた様に聞いて居ります。川柳的にも私生活の上でもそうであつた様に私は思つています。そうした琴人さんが、まだ「川柳雜誌」でどん〳〵活躍されていた時代の句であります。何だか晩年を予想された様な淋しい句だと思つてこの句を出して見ました。何や僕が作りそうな句やなと思うて……

生々庵＝秋の顔と云うのは？

浚食子＝貧乏の淋しさ、秋の淋しさを象徴した様な顔と云うか……あまり顔にこだわらない方がいゝと思うんだが……

路　郎＝然しこの句の作者は秋の顔にこだわつているのではなかろうか、でなければ貧乏があまりに長いだけでは余りに面白味も何もない。私から云えば此の場合、秋の顔と言う表現はキザと云うか嫌味と云うか決して本当に優れた句だとは思えない。ことに貧乏があまりに長いとか云う様な事しか此の句の内容から特に受けるものがない。その点同じ貧乏を詠んでも亡くなつた太田徹底郎などは徹底した貧乏句を作つていた子供の前で借金取に断りを云うのに顔

をしかめると云う様な意味の句があつたが、親として子供に貧乏を知らしたくない氣持がよく出ていたが、貧乏が長いとか短いとか云うそんな事でなく現実な場面を掴んで、うまい事云うてる。それは零人の貧乏と徹底郎の貧乏とでは貧乏のレベルが一段と違う。零人もいゝ作家ではあつたけれども晩年は余り振わなかつた。孤独な生涯を送つている。もつと良い句を提出してくれぬと悪口ばかり言わねばならない。

浸食子＝一寸位叩かれなああかん。

路　郎＝自分が叩かれんからあんな事を云うてるよ（笑声）

浸食子＝一寸位叩かれたらこれから良い句が作れまつしやろ……そんなら先生一つお願いしまつさ。

路　郎＝僕は鮎美君の「百七十八号川柳塔から」

昨日も今日もとんぼは秋を流れぬる

と云う句を提出しよう。秋の季節を詠んだ句と言えば下手に行けば大低俳句の畠へ踏込みそうである。その点たとへ秋を詠んでも川柳は何処までも川柳であると云う句を作つて欲しい。鮎美君のこの句などは如何にも秋の感じがよく出ている。しかも俳句との一線は劃していて嬉しい句である。

生々庵＝秋の句と云えば今先生がおつしやつた通りに俳句の領域に踏み込んで行く傾きが多分にあるし、又秋と言えば取りあえずセンチになり易い。所謂情に竿指せば流され出ている「秋の雲大阪城へ陽は東」と言う句がありますが句だけ見たときには同一人の鮎美さんの句と思われない様に感じられました。

古　方＝俳句を作る人がこの句を見たち何んと云うか知りる。

同舟近詠

大阪市　橋本綠雨

養女にくれぬかとかけあつてみる
病身をなげいてあそぶことばかり

東京都　冨士野鞍馬

役者の子といわれたくない金ボタン
喋らせて置けば按摩はのろけいう
三十四度硯の水がすぐ乾く
こゝまでとしてお師匠はめしにする

東京都　阿部佐保蘭

原爆の写眞はげしい娘の抗議

長野県　高峰柳兒

停年の椅子は異動へ据置かれ
役得を蹴つて不遇の椅子に馴れ

松山市　前田伍健

陳情費視察費そして歓迎費
家元の下向師直ほど集め
着飾つて生簀の魚に似た女
寺掃除本尊様え新聞紙

合どう説明したら初心者に此の句の川柳らしさを知らすことが出來ましようか。

路　郎＝初心者に句を具体的に説明すると云うことは中々むづかしい問題であつて同じ初心者であつても句の匂い、感覚と云うものが感じられる人と感じられない人とでは大変な差がある。色や匂いを感じることの出來ない初心者にはこんな句は解説した処で無駄である。そうした初心者には穿ちの句の解りよいものから這入らせるより方法がないと思う。この句は昨日と今日と云う字句の使い方で如何たもトンボの幾つかが流れて行く様に見えて來るのであつて、昨日も今日もの字句がなかつたら、そうした一つの印像を私達の脳裡の中に画き出してはくれないであろう。兎に角この句を読むと心よいリズムの中に童心を蘇らせてくれるのである。だから初心者が望んでいる様な所謂漫画的な滑稽味や諷刺なんかは感じられないので解説をした処でそうした意味の川柳味はないから、もの足りなく感じるかも知れない。

古　方＝昨日も今日もに生命があるのですなあ。

路　郎＝今日だけでは、この句の持つ影像は出て來ない。昨日も今日もで、田舎なんかで夕方になると何処からともなくトンボが飛んで來る。其の狀景が目に浮んで來る。そしてそれ等のトンボが流れている様に思えるのである。

生々庵＝そうですね。昨日と今日とトンボは別かも知らんが同じトンボの様に感じますね。

路　郎＝所謂劇的な賑やかな句を川柳だと思つている人にはこの句などは俳句ではないかと思うだろう。いかにもすつきりしたいゝ句だ。

浸食子＝それじやこれ位で、最後に先生の句を二、三句並べさして頂いて終ることに致します。

ビールビール秋が來たとて秋が來たとて
秋さらり銀のふすまのものおもひ
なあちろりこれから秋に親しもう

（梨里筆記）

大阪が生んだ世界の
アサヒビール

川柳塔

兵庫県　戸倉普天

一つは樂しみ村長さんの府廳行き
蠅一匹ホテルは皿を取替える
有馬にて
カーテンを明けて又寢る湯宿の朝

平塚市　木村孤浪

左の頰出すひまもなく又打たれ
干しものを入れ〳〵ほめる俄雨
糸花火しばし五つの兒にかへり
悪口を云い〳〵今朝も傘を持ち
新生にして白靴を買うときめ
ノーブルで通るに惜しい爪の垢
中性を誇示するように足を組み
丑の日をソツとしておく暮し向き

横浜市　福田山雨楼

國鉄の事故に退めてもドキツとす
女には惜しい度胸の高良女史
観光地やたらにミスを選び出し
山脈は青くダリヤが眼にしみる
性談に女人夫は逞ましい
税金へ日本人は遊び好き
オリンピック選手に期待す
日の丸と聞けばやつぱり出る涙
浅田一博士を悼む
おもかげはベットのわきの本の山
世界から惜まれながら逝く学者

池田市　戸田古方

隣近所釘の利かないパパばかり
生つちろいのはうちだけの夏休み

京都市　前山北海

南霞町界隈
二百円の遊びを誘う歩道抜け
標札も俊子澄子と山王町
東入船町風景
百円の温泉マーク軒並べ
チュー一杯天下を取つた氣にもなり
夜の心斉橋
振り向けば遊びましようと女寄り

ホノル、市　古川魔花麗

YOU、SHUTUPそれでは妾食へませんKISSMEなんてまどろい恋でせうあの頃の夢とは別なYOUANDITALKTOOMUCH暑さが一層増して來るパンパンの子でもWEAREJAPANESE

ホノル、市　内藤草一郎

損をしたみたいと晩婚こばすこと
ふだん着で御免と風邪の妓酌いで臭れ
どう着てもその前身が拔けきらず
考へりや張合う程もない女
閨閥が何時か恐妻病となり

尼崎市　水谷鮎美

出養生浴衣の柄がこまかすぎ
風邪ひきの母暗がりをゴト〳〵と
青い眼の兒にも持たせた櫻ンぼ

米子市　三鴨美笑

避暑地でも女寢返りうつばかり
寢冷えしたことにしておき医者帰る
向日葵のような女に醉はされて
海浜の裸婦はカメラを恐れない

ホノル、市　白砂旋風

淨瑠璃のドカンと胸を打つのなり
資本家もマルクス論を窃み読み

大阪市　市場沒食子

魚屋の眼にまた出來る新市場

大阪市　須崎豆秋

保険屋に食い下られている暑さ
晝寢していたらしい目で視て巡わり
日本刀ちうものを又造り出し

大阪市　正本水客

奥さんと云われ切身の前に立ち
行水の姿うつくし母と子と
口止めをしに二三間戻つてき
宇宙の廣さへくつわ虫が鳴いて
寢轉んだ足許で將棋さしている
夏羽織子にそむかれた世に生きる
日ざかりを何の用事もなく訪ね

大阪市　丸尾潮花

茶断ちするほどのひとでもなかつたが
意地張つた肩へ蛇の目を着せられる

大阪市　北川春巣

制服の警官文春買うて去に
テント村ポスターにない雨が降り
お見舞が洋酒の話して帰り
D製薬工場見学
病人よ安んぜよ藥倉に満つ

奈良県　尾崎方正

逢ひに行く髪とも知らず梳いてやり

娘十八胸に波打つ走りやう

没食子の転任に際して

夕立のあとを轉任送り出し　岡山県　逸見灯竿

海水着畳の上で泳いで見

農村の恋は草刈籠を負い

蚊を入れた責任息子問われてい　姫路市　夷一笑

再軍備今度は風にそよぐまい

國会をさぼり書翰にいそがしく

破防法河川防止はあとまわし　岡山市　大森風來子

踊の輪ここまでのびた選挙戦

二階借そろそろ養子に居座る氣

恋人がまだ無い証拠の白ズック　大阪市　木下幽王

氷切る音へ一きわ暑さ知る

還暦も過ぎて花火へ騒がない

手内職どこかで花火の音がする

あつち向いてこつち向いて若い母ちゃん汗みづく

病氣が知れ渡つた頃に死んでゐる　北浜

捨てた氣で來いと株屋でおどかされ　大阪市　福田妄夢

かき舟が夜の重さに耐えてをり

千円で買はれたくちづけにあるまごころ　出雲市　尼綠之助

秋立つや南瓜あらわに横たわり

さはあれどヒューマニズムは利に遠き

ともすれば働くことに飽きんとし　下関市　弘津柳慶

中元の中身は子供知つている

朝露へ螢はもろく死んでいる

何思つたか妻今日ビール冷しとき　尼崎市　小林文月

組合創立総会

サクラとも知らず應えに汗をかき

吹殻の長さの違う停留所　札幌市　山根白星

顔見ちや嫌と貞操奪はれて

時計見ることが愛人氣に入らず

ヒロイズム若いですなと言はれたり

パラソルの連れは五六歩先で待ち

せめてもの婦警は櫛を貸してやり

金貸しの塀を曲つたシルエット

縁談

顔よりもこころと押しつけられかゝり

口紅のないつましさを母乗り氣　大阪市　渡辺孫拙

行水に藝術味あるシャボンの泡

一線を越えて愛情がたと落ち

紙芝居ポプラの蔭がまつており　大阪市　冨岡淡舟

金の要る話氣のない返事する

据膳へかくなる上は是非もなし

当にせぬ金に手土産まで添えて

頼りない兄貴に金を借りられる

監獄の方が待遇よい世相

謹厳な父に妾があつたとき

物申す声は学生アルバイト　奈良県　西辻竹青

職務放棄君もか麻雀更けてゆき　山口県　長野井蛙

ひとり旅すりと知つたも翌る朝

無心とは知れど嬉しい子の手紙

金縁を掛け敗戦を嘲笑ひ　大阪市　麻生梨里

洋裁で喰べる理想も二十過ぎ

独身主義のようにも見える嫁きおくれ

男には男の社会などゝ呑み

おごられたお世辞は固くなつて云ひ

新米の車掌と知れる親切さ　岡山県　丸山弓削平

魚屋も心得鰯がありますよ

上の子は足だけ母に触れて寝る

千歳の遺憾税務署焼残り

伏魔殿めく大臣の二号邸

妹に歯がゆがられる三代目　岡山県　直原七面山

逢曳の二人へ星の降るやうな

腕時計にせきたてられて逢いにゆき

腰の線農婦としてのたくましさ

春風へ甘へ切つてる腰の線

病院の窓から田植見て暮し　宇部市　上林粗影

妻も子も喜ばぬ中元のたばこ受け

息子の恋を知つたくすぐつたさ

僕の机にツイたまつたパチンコ玉

昇給はなし歯車の音にハットする　姫路市　狩野燕子

いろりちよろ〳〵傳説と共に燃え

山越えて〳〵求めた釈迦の水

裏口へごめんなはれとアッパッパ　大阪市　西森花村

日本語も英語も誤字のラブレター
二枚舌位で昔は騒いだり
仙人に麓の酒がよく匂ひ
鳥取市　河村日満子

手術経過声を落して尋ねられ
入院付添寝巻とまでは氣がつかず
雨の日を叱言幸兵衛さんで居る
ハーモニカを吹く入院をしていても
兵庫県　家沢薺花

蟬捕りのコースか草が踏まれてゐ
貰い風呂総張りタイル撫でて見る
スイッチの意外な方で灯がともり
岡山市　藤本満年

蓮開く母の精かとたちどまり
無き智慧を絞つて人を陷れ
一旦堰を切れば女のかまびすし
早く去ねといわず時間表を出し
感心をしておしやべりを拜見し
妻といて煙草のほかはまかせきり
熊本県　西口如川

褒めに來たのか家を褒め庭を褒め
訪えば白エプロンのマダム振り
徳島県　姫田夕鐘

マラソン
午前二時日本へけはしきアナウンス
張切つた氣持がほどけゆくニュース
十六年の空白おぎなうすべもなく
日本完敗スポーツ紙賣れ残り

自転車
穴ともならず自轉車の負けつぶり
岡山県　福島鉄兒

ただでやる様に縁談持つてくる
おでん屋で兄弟分の元巡査
岡山県　直原湖月

暑中見舞貰ひ生きてるなと思ひ
幸福におぼれ切れない道を行く
満員車西瓜を提げて草疲れる
履き馴れた下駄捨て難く〳〵
浴衣一枚買ふに姑の意見聞き
親孝行今日は歌舞伎に母と座し
岡山市　藤本茶々

これは買おこれは借ろうと嫁支度
出たらめも言えない友の正直さ
行水へ今度は父ちやん水を汲み
兵庫県　榎南夏六

商人の小骨キレイにせゝるなり
うつかり物言えば女強かりき
大阪市　西いわを

くねらせてみせる姿の娼婦めき
未亡人株の話に腰をすえ
岡山市　服部十九平

隠居部屋明治の型の煽風器
組の名の旗がはためく竣工期
環境が右と左にして了ひ
役得の薄謝積つて家が建ち
酔漢へ神父十字を切つて過ぎ
変哲もなく東から月が出る
岡山県　大森娛句樂

上役が飲むまで待てぬ紙コップ
読み耽る目の邪魔になるほつれ髪
啼くだけはなく蟬読経とは別に
茄子の牛胡瓜の馬も漂へる

涼風はパンツで轉ぶ俺に吹き
附箋つく暑中見舞へ詫びたい氣
風鈴は彼の女が吊つて呉れた音
尼崎市　長谷川三司

プラタナス二人は歩く事がすき
大佛の片膝かつて憐寸する
こそ泥に見舞われ
お被害がなければと云う巡査なり
兵庫県　若林草右

酒煙草麻雀止めて生きようとは
大阪市　足立春雄

イヤリング不貞の色に螢光燈
熊本県　有働芳仙

見合席母もセットで若返り
恋人の裸の線を聯想し
貞操はとうに失くしたお下げ髪
下関市　阪田良坊

人生を花火線香の様に説き
ビルの谷底でも何か動いてゐ
不精髭天皇様をうれしがり
下関市　石川侃流

廣告か太い中元澁團扇
パチンコ屋ボツ〳〵飲み屋になりはじめ
母の來る迄手花火の待たされる
大阪市　安岡珊枝郎

打水に隣の誼示してゐ
饒舌の夫人話を食つちまい
広島県　山田季贊

さあこいと課長將棋の碁休
胸を病んでも女は太るだけ太り
海水浴父ちやんのんびり飲んで居る

世話女房光の箱へバット入れ
どうせもうヤケで金利に触れず借り
貧しくも丈夫ならいゝと誰が云うた
競輪ファンの皆様などゝおだてられ
降つて湧くような幸福遂に來ず
だるそうに借金取りが腰を上げ
神聖な労働ちよつと汗くさし

玉野市　中村ただみ

大阪市　山本葉光

盲人をさびしがらすなテレビジョン
病母の無理ハイハイときく齢となり

大阪市　東喜久堂

労れば老婆の愚痴の限りなし
肺病が肺病患者敬遠し
街角は大銀行が占領し
姉妹で仔猫え赤いよだれかけ
多汗症しかも一倍おしやれなり
時刻問えば我も〳〵と腕を見る
労基法え晝寢の休み欲しいなり

大阪市　鈴木天貧

まゝごとの仲間に父も呼びにくる
とんぼ釣る子の背へ夕陽赫く落ち

倉敷市　木村千容（千代男改め）

貞女ですいわんばかりの話ぶり
坊ちやんの社長はオベンチャラがすき
公僕だから勳章欲しくなり

岡山県　田垣方大

ひきよせたところへノックの音がする
縣人会檢事が酒をつぎまわり
仲違ひ知らず朝顔のびてゆき

石川県　那谷光郎

自然美を無視してルージュ塗りたくり
破防法家憲にしたいと云う男
遊説へ代議士蜘蛛の子散る如く

大阪市　木村水堂

云うことがあるので酔うて帰つて來
野心ある人のお世辞を軽く聞き

大阪府　膳所新三

引揚のスマトラ焦けがよく目立ち
雲雀鳴く下をくぐつて出勤し

熊本市　花岡英子

修養しますわとつんとすね
退屈をすれば先生でも騒ぎ
夾竹桃少女の夢によく似たり

堺市　八木摩天郎

青空へ大大阪の立つ煙
考へたわネエと女にあなどられ
飲みねえにフト石松を思い出し
朝早うラジオは尋ね人のあり

高槻市　福田丁路

有明海にて

雲仙に見とれ玉散る潮を浴び

長崎にて

汗ダク〳〵チャンポンもてあまし
故郷で土産にカボチャ背負はされ

岡山県　水谷谷水

二号さんも犬も秋田の産の由
盆踊り長女の色氣見て帰り
失業の氣樂さ朝顔みせに來る
ヤスリでもかけにや國会目が覚めず

岡県岡　相原一善

すべてもうまかせきつたる妓の寢顔
慎しんでいるに舌禍はまだ続く
成績はどうあろうとも社長の子
刑務所の様に紡績の塀高し

岡山県　岡田夜潮

よちよちが水番帳を持つて來る
行水の子を大ぎょうに父が受け
靴ベラにいやな名刺を代用し
人前で蛋がつぶせる齢となり

岡山県　中谷仙坊

動章は心の糧と仕舞うとき

岡山県　坂井三葉

黒帶になつて稽古着派手に提げ
失業の晝寢と知らず羨まれ
晝寢した眼に青過ぎる夏の海
年若い巡査に世渡り教えられ
初心者の柔道はちとダンスめき

岡山県　政田大介

辻つまの合はぬ話へつねられる
行水をはちらふ程に娘が育ち
泳げない男女に見くびられ
母迄が僞の角帽まだ信じ
子がなくて犬の安産祝はれる

岡山県　臼井三林坊

言ひ遺す事多かりし多かりし

川柳大學（Ⅵ）

――川柳の本質――

福田山雨楼

▽今日は川柳の本質についてお話下さい。

○この問題は兎角忘れられ勝ちであるが極めて重要である。所謂本立つて道生ずで本質を究めることによつて、川柳の在り方、嚮うべき道が明らかになる。歴史が示すように川柳は俳諧の二律背反、即ち寂びとおかしみのそのおかしみの風流を受継いだもので、これが日本國民の志向にぴつたりと当嵌まつた結果、今日のように普及され支持され発達したのである。國民大衆の手によつて育成され援護され愛好されたのである。つまり川柳の本質というものは國民大衆によつて定められたのである。そう云うことが云えると思う。おかしみの詩情は國民各階層の生活に密着し、永遠性のある人間味に直結している。人間に笑うと云う本能の存する限り消ゆるものではない。

▽しかし俳諧の風流に歴史的心然性があつたにしても、文学的永遠性が確保できるでしようか。風流の封建性が時代の波に洗い去られるのを防ぎ止めることができるでしようか。

○鋭い質問である。現代人にとつてそれだけの懐疑がなくてはならぬ。史的観察からすれば連歌俳諧から前句附が生れ、更に柳樽として独立したことは江戸末期町人文藝の隆盛期に同調便乗した流行の姿である。この見方もあるであろうがそれは皮相の観たるを免れない。芭蕉が身を以て正風を樹立したように初代川柳も新風川柳を打樹てるため一生を捧げたのである。彼自身この新風を川柳とは称しなかつたけれども後世彼の徳を讃えて川柳点、更に略して川柳と呼ぶに至つたのである。そして彼の選によつて遺された多くの名句は現代の今日と雖も吾人の肺腑を衝くものがあるのである。柳樽の句は生きているのである。この文学に永遠性がなくて何であろう。風流という言葉は如何にも封建性を帯びた嫌いがあるがその眞意は所謂不易流行であつて、詩本然の精神を指すものである。句碑になつた路郎先生の「ふるくとも僕には仁義礼智信」の如く、五常の道、五典の教えは如何に文化が進んでも廃ることのないのと同断である。世人は時代と共に歌舞伎の衰退を説く、が事実は逆である。歌舞伎に詩があり美しさ面白さがあるからである。更にも一つ云えば歌舞伎には生命を打込んだ至藝があるから滅びないのである。川柳も片々たる短唱ではあるがこれに魂を打込めば決して滅びるものではない。

▽川柳発生の根拠、発生の社会的本質についてお話下さい

○高村光太郎は「詩の本質」について、天磐戸開きにおける八百万の神々の喜びの唱和「あはれ、あなおもしろあなたのし、あなさやけ、おけ」の五句から成る一連の感歎の言葉こそ詩の神髄である、とのべているが川柳の淵源もここにある。それに社会百般のこと、日本人の生活態度が俳諧的、即ち簡潔で直截を好む風にあることが融合して、ここに國民的郷愁が最も大衆的である町人の手によつて具現されたのである。そして俳諧の二大別即ち俳句と川柳の一方の荷を背負つた次第である。しかも江戸町民の仁義に厚く折目正しい生き方は、秩序を重んじ正義を履み、平和永かれ人情美しかれと念願し、新憲法の前文にある所謂

書名雑感

長野文庫

これは昔の話だが、某日某古本屋へ一人の女学生が這入つて来て、いとも恥ずかしそうに小声で「まくら草紙はありませんか」との御質問である本屋の主人はテッキリ「エロ絵」の蒐集家と早合点して「兎に角こちらえ」と奥の一間に招じ入れて色彩いとも鮮かな「まくら草紙」を見せた処、その女学生は真赤になり乍ら「こんな絵では無いのです、文章を書いてある本です」との仰せ故、重ねて「一の谷軍記」とか云うものなど謄写版印刷の本を見せたが、益々恥ずかしがるばかりで、どうも話の辻褄が合わない、よく聞いて見ると「枕の草紙解釈」の本を探して居る真面目な女学生であつたが、最初に小声で恥ずかしそうに尋ねたので間違つた訳である。

ところで今でも時折、斯うした枕草紙式の言葉で本を買う客がある、源氏物語とか伊勢物語とか太平記とか玉勝間などは間違え度くとも間違わないが、檀園文集をカシゾノモンシュウとか義経記をヨシツネキとか古今和歌集をココンワカシュウとか、琴後集をキンゴシュウ、山家集をヤマヤ集、梅園叢書をウメゾノソウショとか読む人が甚だ多い昔の本なら仕方が無いとしても現代の書名では宮本百合子の道標をドウヒョウ、織田

人類普遍の原理に則つて行動したため、川柳に現われた人間親愛の情を一層強く盛りたてたのである。古川柳は江戸町民の氣分情調を最も端的に巧みに現わしていると云われるが故なきことではない。說をなす者は「川柳は江戸時代の欲樂が生んだ道樂者で、鬱屈が生んだ惡戯小僧、のんきが生んだ我儘息子、不安が生んだ捨鉢野郎であつた」と放言したが、それは狂句やワイ句にのみ眼をそそいだ偏狹の觀である。面白いことには川柳は小說の縮圖の如く、社會人生の現實を素材とし、自然主義的表現、感覺的探求、心理的追求、理想主義的訴求、浪漫的詠嘆等が手をかえ品をかえて表白されているのである。これは自分で作られる詩をもたねば承知しない多數日本人の傳統的願望であつたとも云えよう。とりわけ古川柳があらゆる社會面及びその裏面に鋭い視野を投げた所以は、その詩形がそれらを表現するのに效果的であつたと同時に、正義は笑う、ユーモアは批評であると云う川柳本來の哲理にマッチしていたからでもある。いみじくも川柳は小說と追いつ追われつ同じような曲線を描きながら進展を續けているのである。

▽俳諧の分流に甘んずる古川柳のゆき方、叙法、表現態度等については、新人の間に相當の不滿があるようですが…その問題は度々むし返されているが仲々割切れない難問である。と云うのは革新派、新興派、戰後派と云うものは、それぞれの惱みや懷疑にぶつかつてこれを打開すべく眞劍な闘爭に端を発し、新しい建設の爲には古きを破壞してかからねばならぬと云う考えに支配され易いからである。じつくり構えて川柳の本質から探求し、多數の意見を聞いてその中庸をとると云つた余裕が乏しく、遮二無二に自己の主張を通そうとする。その結果一時は非常に華々しく前衛的蹶起をするが、次第に冷靜にかえつて來ると行過ぎであつたことや、踏み違つていたことに氣付き、或る者は自重退嬰、或る者は自說を放棄して他に轉向したり、自ら興味を失つて沒すると云つた經路をとることが少くない。加うるに近頃の俳句が季と十七字の鉄則を忘れて人間探求や社會觀・人生觀を盛ることに走るものが多く、川柳の畑を荒しにかかつているので川柳家として動搖を感じ握手を望んでいる輕薄者流もあるのである。古川柳の姿をそのまま現代に移そうとすることは、時代感覺を忘れたものと云わなくてはならぬが古川柳が遺したリアルな精神、おかしみの詩的基礎と云うものを離してはならない。古川柳が教えてくれた魂の欲喜、生命の育成、人間の眞實、風流の骨髓と云うものを把握しなければならぬ。余り話が堅くなつたのでここで一挿話を入れるが、麻生葭乃女史はその雅号について次のようにのべられたことがある。「雅号の由來についておたずねの御手紙に接しましたが、本名ヨシノをよしのとして使つていましたのを結婚を記念といたしまして路郎が葭乃と書き改めました までの事です折角氣に入りの雅号をつけましても思想が変化して行き、其雅号が厭やでたまらない時が來るたんびに頭を捻らなければならないという事はとても面倒な仕事ですので結局、親から頂戴した名にして置いた方がそうした迷い心も出ないだろうと考えた上の雅号葭乃」です一見平凡な言葉のようですがその中には多くの示唆が含まれていると思う思想の変る度に川柳の作風が変る人は少くない。劍花坊もその一人だつたと思う、しかし劍花坊は川柳百七十年史を綴りながら、前後六年遂にその完結を見ずして永眠されたのである。劍花坊が川柳の根源を古川柳の中にいていたことはこの一事を以てしても窺い知ることができる。

▽川柳家が各自古川柳の中からその眞髓をつかみ出して、本質を自得されることは結構ですが、他律的に本質を押付けられることはファッシズムの嫌いがないでしようか。

○その通りである。かつて田中辰二氏は「川柳の本質」と題して明快なる論說を発表され、本誌にも掲載されたが、

田作之助の夫婦善哉をフウフゼンザイ、石川達三の蒼氓をソウミンなどと讀む人は多いことだ、流石に潤一郎などになると細雪でも春琴抄でも間違いなく讀む樣だ、漱石の明暗をアケグレと讀み、草平の輪廻をワマワシと云つた大馬鹿高校生もあつたそうだ。牧水の幾山河、吉井勇の玉蜻、利一の刺羽集、漱石の漾虛集などは何が何だか分らずに濟む人も多いらしい。

川柳に「ゲヨウテとは俺のことかとゲエテ云い」と云うのがあるがゲエテ文集、ゲーテ詩集、ギョウテ研究、ギョウテ論集等がありニッチエ論、ニイチエと何々と云う本もある、ストリンドベリヒ全集、ストリンドベルク集、ミケランゼエロあり、ミケランゼロあり、吾妻の民決、信夫の外交史、土方の經濟原論など文字で書いたのでは変に見える。

最後に内村鑑三と云う人は長い題の本が好きと見え「余は如何にして基督教信者となりしか」とか「後世への最大遺物デンマーク国の話」とか云う書物を出して居るが、最近宇佐美誠次郎と云う名前も長い人が「危機時に於ける日本資本主義の構造」と云う本を書いて居る、アルーバ神父の書いた「聖フランシスコ・デ・ザビエルの書簡抄」と共に書名としては長い方ではあるまいか。

その末尾でこうのべていられる「私は川柳の本質に対して之等の滑稽諧謔やうがちや感覚美を挙げれば、或る程度まで確かであると考えるが、之等の本質が直ちに藝術としての價値を高める標準になり得るや否やは本稿では云うまい。併し雑俳として今まで余り顧みられなかつた川柳が世界独特の短い笑いの文学、うがちの文学、感覚的な文学であると云う以外に、江戸時代に発達した眞の民衆詩であり人情詩であると云う以外に、猶江戸中心時代の制度、慣習風俗、信仰、言語、其他の生活の縮図である。川柳の研究によつてそうした方面がより闡明されてゆく機会の來らん事を要望するものなる事を附記したい」と。その学究的な謙虚な言説に敬服すると共に、自説を強要すべきものでないことを痛感する次第である。この点路郎先生も極めて開放的で、先生は先年こうのべていられる。「（前略）従つて川柳は諷刺文学ですねと云われれば、でもある位にしか思わない。人情の機微を穿つので人情文学ですねと云われれば、でもあると思つている。それ以上には考えようと思わない。何々文学でも無い句も相当にあることを知つているので、一々そんなレッテルを貼ることを私は御免蒙りたいのである。強いて訊かれれば私は人生派の川柳をやつていると思つている。要は自分の句を生み出す苦しみを経て、新しい境地へ出て欲しいのである」とのべていられる。巨匠が若い作家の將來を深憂されての箴言に耳を傾けるべきである。

さて翻つて自分を振返つて見ると、自分はこれまで川柳の自分としては忠実に所信をのべたつもりである。意のある方は遠慮なく反駁なり攻撃を加えていただきたいものである。また私見に共鳴して下すつた方でも廣く他の所説と彼是比較検討して、最も中正なる結論を求めらるるよう希望する。そして最後に老婆心ながら申添えたいことは、新しい境地の句を生んだ場合は尊敬する選者に託するか先輩の批評を経た上で発表することである。秋櫻子が虚子から離れたとき虚子は「彼の句を見るものがなくなるではないか」とその軽挙を惜んだと云うことであるが、選句というものはかほどに厳しいものである。仮令本質論の発表はなくとも尊敬すべき選者には確固たる信念がある。本質を身に体しているのだ。この選者に体当りする覚悟が必要である。

川柳の理論的推進元より必要であるが、作家としてはどこまでも作品本位に精進し理論はその裏付けとして味讀し思考すべきだと思う。かくして作家的成熟と本質的強さが加わるのである。

不朽洞句帖

麻生路郎

院長をもみくちやにする藝妓が居

腐肉とは女の中のお女將さん

老人の日に旗竿がまだ買えず

て居りますと答えている。」また最近の言葉として「（前略）今の若い作家のうちには、川柳とはこんなものだと云う概念に囚われて作句している作家が多すぎるのではないかと思われる。しかし、ムヤミに外形だけの模倣に終る作家が殖えることは考えねばならな定義を書いたり川柳原理を発表して、川柳の本質に触れた言説を世に問うた。これに対して数氏から激励やら高評をいただいたが、これと云う大した反撃に接していない。しかし自分はこれでよいのだと思つている。傳統尊重と独断的な所論も少くないと思うが

忘れもの

木村水堂

私の不在中、火事の場合はどう、颱食の場合はどう、地震の場合はどうと避難要領を常日頃家人に云い含めて居るが、まだ一度も予行演習をしたことがないので先日の吉野地震の時、私は蚊帳の吊り手で喉を引つ掛けたり電燈の笠で頭をぶつつけたり、よう〳〵家人全部を戸外へ避難さしてさて頭数を点検したら一人不足している。泡をくつて引返えしたら、長男を蚊帳の中え置き忘れて居た。

前號正誤

一五頁一段一行目及三段目七行目浅田博士の雅号右門・は右聞。▼二一頁四段八行目及九行目の句の作者光男・は光郎。▼二四頁三段三行目の清貧・は清貧。二五頁一段三十一行目の矢張・は矢張りと訂正

一品料理と生そば
グリル 芝鶴
上六キヤピトル映画館 東三軒目

にきひとり美顔水
渋谷風天堂

川柳今月の歴史（十月の巻）

主要事件、行事、動勢、人事等

昭和二十六年十月四日京都川柳社創立二十周年記念大会を京都市教育会館で開催。同八年十月十五日川柳雑誌十周年記念行事として浅草雷門前並木倶楽部で東京句会開催。同年十月きやりグループ解散。同年十月号改造誌に阪井久良伎は川柳名句解と題して十三頁に亘り執筆同九年十月号嚴松堂展望誌に塚越迷亭は川柳雑誌考―内地鮮満オール川柳境展望―を執筆。同十一年十月京浜川柳吟社（十二社）が連盟結成。同十二年十月大阪松阪屋倶楽部川柳講座が講師麻生路郎により開かれた。同年十月から柳多留二十四篇輪講が花岡百樹、森東魚により開かれ三味線草誌に発表三十七回までつゞく。

主要圖書の出版

明治三十一年十月（以下何れも十月につきこれを省略）骨川道人編「古今川柳一万句集」が博文館から。同三十二年「川柳風狂句改正人名録」が東京井上書店から。同四十三年「末摘花」（所謂而笑子本）が東京滑稽文学社から。同年「袖珍文庫十五編柳樽一輯」が三教書院から。大正元年芳賀矢一校訂「川柳選（袖珍名著文庫五〇編）」が富山房から。同年大野露草編「歴史と川柳、川柳源平物語」が中京川柳社から。同二年高好風編「川柳卯木句抄」が中京川柳社から。同六年沼波瓊音著「やなぎ樽評釈」が南人社から。同年吉成剣突坊編「新川柳剣花坊句集」が柳樽寺会から。同九年麻生路郎著「川柳漫画懐手」が奎文堂から。同十一年正木準章編「朝鮮川柳」が川柳柳建寺から。同十三年木村半文銭著「代表句選川柳の作り方」が弘文社から。同年宮武外骨著「古川柳研究変態知識」が半狂堂から。同年広谷雄太郎編「誹風柳樽全集（六〇編まで）」が図書刊行会から。同十四年武笠三椒著「誹風柳樽通釈二編」が有明堂から。同年佐藤紫絃著「江戸時代川柳と吉原」が岡村書店から同十五年岡田三面子編「木卯柳句抄」が日比谷図書館から。同年谷脇素文編「川柳漫画うき世さまざま」が講談社から。同年西原柳雨著「川柳参尾志」が図書刊行会から。昭和二年田中繁造著「川柳と国字論」がカナモジニッポンシャから。同四年西原柳雨著「川柳から見た上野と浅草」が中西書店から。同五年川上三太郎、矢野錦浪共編「川柳漫画全集（一）明和の巻寸鉄草紙」が平凡社から。同六年道柳しん平編「道柳」が教の友社から。同年岡田三面子著「難解川柳狂句（主として詠史）」が同氏から。同八年陸軍省つはもの編「川柳漫画笑倒兵」が帝国在郷軍人会から。同年川上日車著「日車句集」黒木鶴足著「鶴足句集」森雞牛子編「溪花坊句集」が何れも川柳叢書刊行会から。同年磯部孔雀著「川柳孔雀集」が室積番傘川柳社から。同年片岡浩子編「句集石楠花」が津山から。同九年玉吉、有史、一吉著「おもいで三人集」が同氏らから。同十一年坊野寿山著「新版花山吟寿山調」が松花から。同年後藤蝶五郎著「句集壺」が川柳みちのく吟社から。同年大楽八郎著「大楽八楼集」が大楽宇一郎から。同十三年麻生路郎著「新川柳評釈」が不朽洞から。同年川上三太郎編「昭和川柳自選句集」が川柳研究社から。同十六年カルフォルニヤ川柳会編「在米作家句集」がロスアンゼルス同胞作家記念集から。同十七年川柳大陸社編「句集川柳共栄圏」が大連から。同年高田抱一編「大東亜戦記念句集」が川雑三池染科支部から。同十八年市川御舟著「第三短句要説」が句道会から何れも出版。

主要柳誌の興廃

明治四十三年中京川柳社から「柳」創刊、鯱鉾の前身である。大正六年神戸前田青岸らによつて「柳太刀」創刊。同十三年東京から「みやこ」創刊。同十五年「静岡川柳社から「静岡」創刊。昭和三年大連川柳社から「満洲」創刊同四年大和長者吟社から「うるか」創刊。同五年東京から「川柳みやこ（新開型）」創刊。同七年京都から「はりこ」創刊。同八年大大阪このみ川柳研究会から「このみ」創刊。同十年横浜貿易川柳会から「川柳よこはま」創刊。同年横浜から「川柳地帯」創刊。同十一年仙台浜夢助によつて「川柳北斗」創刊。

著名川柳家の他界

佐藤鳴峯（東京）は大正十年十月十一日永眠、二十四貫の大兵だつた。塩田大棗子（胆逸銭）は昭和三年十月二十一日二十四才で病歿、川雑螢ヶ池支部同人。窪田而笑子（東京）は同年十月二十七日六十三才で永眠、明治四十年頃読売川柳会を興し剣久両派に対立した、媛柳川柳会主宰。三笠しづ子（東京）は同七年十月十三日五十一才で逝く、柳樽寺の閨秀作家。三木一選（大大阪川柳社造幣局研究会）は同年十月二十日郷里八幡で、病歿。長野吉高（松山、支那戯曲研究家）は同九年十月十六日永眠、川柳雑誌客員で多年に亘り寄稿された。加藤南枝（犬山すげ笠会同人）は同年十月五日三十九才で他界、漫画をよくした。須釜広楽（白河川柳能因会同人）同十年十月二十九日四十才で永眠。田中美水（横浜）は同十三年十月三日他界、久良伎に私淑し手足が不自由であつたが健吟家。古田八白子（小樽、氷原川柳社同人）は同十四年十月二十日永眠。河野鉄羅漢（岡山）は同十六年十月二十二日五十六才で病没。大正年間柳界に革新の炬火を挙げた。三原狂路（山口県）は同十七年十月十五日二十九才で倒れた、脊髄カリエスで闘病しながら川雑に投句をつゞけた。山本琴也（神戸、ふあすと川柳社同人）は同年十月二十六日他界。

福神田山雨楼編

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものかから」説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一読を薦む。

B六版　（二一二頁）　定價一〇〇円　送費　十六円

取次御注文は　大阪市住吉区長居西五丁目二五　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

近作柳樽

路郎選

時が癒して医者礼を受け　広島県　黒本　芳泉
籤にも頼む金の要る月　同
慰藉料の請求権は保留する　同
大臣も樂じやないけど止められず　同
アパートに意外な人の末路かな　同
台所から出やうとはせず女老ひ　同
からかつて見たいオンナの二重アゴ　同
潤沢になつて南瓜道でなり　兵庫県　酒井ひかる
お著まで割つて貰つて彼女喰べ　同
死に際にまだ税金を心配し　同
かん性な妻にくつろぐ暇もなく　同
何事を拜んではるのかいうなじ　同
御祈禱をパーマの上にして貰ひ　同
洋服を手で縫う妻のいじらしく　同

熟発二ヶ月余

辞世詠んでたらサイレンが鳴つた　貝塚市　芝無骨
ベッドから犬にチン〳〵なども　同
医者代になるかも知れぬ書を曝す　同
看護婦がさがし廻るほど治り　同
命もいらぬなどとはアブレ呼ばわり　同
銀行のくれた扇子をばちつかせ　同
はたからは馬鹿と見られるエキストラ　同
七七忌済むと訪ねる人もなく　ハワイ　滝純香
重態と聞いて借金返しに來　同
金が出來ると仲人までが頭下げ　同
死ぬるまで大金持と信じられ　同
酔うたはづみに義妹を女にし　同
あれ〳〵と思う間に金を借りられる　同
ちとすぎたせつゆは窓へ息を抜き　愛媛県　渡辺　曉童
昨今の暑さへ課長叱らない　同
別室へ呼ばれ小さな無心され　同
女連れ汽笛二声喰べ始め　同
神罰を恐れ氣もなく席を借り　今治市　長野　文庫
誘う水無くて貞婦となつて死に　同
もの云へば首が飛ぶ世が近づけり　同
予備隊は筍竹になる如く　同
アトフミ」のま、四五日の言いのがれ　鳥取市　森本法泉子
どこへ行く人か袴に夏羽織　同
また客が來たので麦茶飲まされる　同

賀露海水浴場にて

飲むばかり泳ぐ氣配は更になし　同
トラックへ日傭たあいなくねむり　呉市　松永四季無
つりかわもよきもの窓の景みどり　同
身についた媚態が誤解のもとなり　同
花札の背すじ不孝な汗がうき　津山市　定金白柳子
長男の恋の相手を見に出かけ　同
貴夫々々と金の要る事ばかり云う　同
イヤリング男がみんな馬鹿に見え　同
バラバラにするわと養子おどかされ　同
貞操が何さ母親ドキリとし　高槻市　谷脇土佐兒
女王蜂夢にえがいて堕ちはじめ　同
アンミツを奢り見合の報告し　同
魅力もう魔力に近い線と艶　同
のんで喰べてまだタクシーも奢らぬ氣　大阪市　山崎帆加夫
一せいに鳴きませうかと雨蛙　同
雨蛙この一匹が破調です　同
下駄箱の靴コーロギが飛んで朝　同

雑筆春秋

三日議長の俳句

東野大八

解散ほどなく大野伴睦センセイが、選挙区の岐阜に帰つてきた。早速その宿舎に出むいて仕事にかゝる。その話のなかのこれは抜すい。「全国の新聞に流れましたセンセイの句〃柄にない椅子につきけり秋暑し〃あれですねあれはわれわれとしては非常に興味深い句ですね、感銘しましたよ」

「万木（彼の俳号）名句集のうちに入るかね、ワツハ、、」

「ところが、抜打ち解散で、あたら、この名句もからりと変りましたね」

「柄にない椅子につきけり三日間、天晴れ三日議長の所感だよ」

実をいえば、これは私だけの感想ですが、あれは〃秋暑し〃のまゝで後の句も観賞させて貰つた方が味合があつた様ですね」

「一句を二様にとるというわけか、嬉しい暑さ、腹の立つ暑さ」

「左様、ひよつとこ面とお多福面の二つを裏合せにしたような具合に……」

「成程ね」

「で……もう一つ、川柳人の私として見逃すことの出来ないものが、あるんですよ。それは下五の〃秋暑し〃これは俳句

看護婦のある時母の匂いする　貝塚市　上坂　朱人
かそかなるたのしみバケツに桃が冷え　同　同　水橋　溪泉
訊ね人てふ番組がまだあつた　同　同　野田素身郎
こんなのも持つているわこと虫干しし　同　同　同
記録虫君も人の子大きな地球　大阪市　石田　沐天
刑務所の課長へ届く逮捕狀　同　同　津田　千舟
声優は日蔭そだちの声を出し　同　同　同
わてどうだすとは事務娼婦めき　同　同　宗高八ッ茶
手を振ればさらば故郷と云う汽笛　佐賀市　南川　光男　同　同
月末の借金取りへ竿を持ち　同　同　武安　嘉彦
授業料また催促をされる頃　同　同　同
惚れているから靜かに目を閉ぢる　大牟田市　晋二改め小川　雅人　同　同　村上　旭童
ダンスが出來ず先方のお氣に召し　同　同　村本　香果
助だつた女に男迷い出し　同　同　宮本　甲馬
瘤つきを承知で貰う不倖せ　岡山県　藤井　呆声　同　同　青柳扇子仙
月給日また飲んで來た靴の音　同　同　同　同
月の出を待つて長居の腰をあげ　同　同　同　同
背を出して夏は女のものとなる　東京都　松井　清志　同　同　太田垣蓮月
求婚へただ煽風機頸をふり　同　同　同　同
都会の灯追ひつめられた身の置場　同　同　同　同
鏡台へお女將四十の化粧する　広島市　福岡葉留路　同　同　横田　方眠
惜しい絵を子は無雜作に土に描き　同　同　同
一輪の花も子よりは手がかゝり　同　同　同
提灯も外し色衇秋になり　大阪市　吾郷　玲人　同　同　同
社会科よ社会科よと子は出掛け　同　同　同
田中千代伊東茂平と撰つて見る　同　同　同
降架進水大漁を夢に見て　釜石市　寺崎　三峯　同　同　同
夕涼みおしめと同じ柄が來る　同　同　同
藪入の思想ちよつぴりたしかめる　同　同　同
スモールの事にふれてる氣のひがみ　岡山県　長尾　越鳥　同　同　同
汗の出た金とも知らずパチンコで　同　同　同
二匹飛ぶトンボへ目まで据えており　大阪府　大橋　溪泉　同　同　同
癇癪もたたない程に角がとれ　同　同　同
算盤の兎狀が泣くお茶運び　同　同　同
金力は子供でさえも反り返り　同　同　同
恋人の手前まめまでだして漕ぎ　倉敷市　野田素身郎　同　同　同
冗談では好きだとはつきりいえるのに　同　同　同
記念スタンプ集めて家出の娘が帰り　同　同　同
蠅叩き三振させて逃げた蠅　貝塚市　津田　千舟　同　同　同
ダンサーの受話器へ邪魔なイヤリング　同　同　同
祇狀に尻こそばゆいこと書かれ　同　同　同
露地裏で見れば化粧の剝げたビル　岡山市　宗高八ッ茶　同　同　同
妻の夢叶えてやれず叱つとき　同　同　同
風呂を借る母家へ間借り傘が要り　同　同　同
初勤務お客の様に店に立ち　貝塚市　武安　嘉彦　同　同　同
朝の湯へクリップまぶしい程につけ　同　同　同
交際は交際嫁く氣などのなく　愛媛県　村上　旭童　同　同　同
いつからか蟬もうるさいもののうち　同　同　同
まだあんな夢あり男とはかなし　同　同　同
働いたばかりで養子ぼくり逝き　京都市　村本　香果　同　同　同
月給と月賦凸凹考える　同　同　同
デパートの香奠返し判をとり　同　同　同
病人の句を病人が○をつけ　同　同　同
儲けたか檜の匂う涼み台　貝塚市　宮本　甲馬　同　同　同
知事会議そら涼しかろ登別　同　同　同
すわ地震母は位牌を抱いていた　同　同　同
金だけが味方で生きる未亡人　大阪府　青柳扇子仙　同　同　同
重爆のようにぶんぶん飛び去れり　同　同　同
虎造のあとは香油のスポンサー　同　同　同
脱稿へやつと子供のパパとなる　貝塚市　太田垣蓮月　同　同　同
稿料をヒドラジッドが待つている　同　同　同
新藥が最後の背廣賣れと云う　同　同　同
風信機私しやサスライ風まかせ　大阪市　横田　方眠

です。ところが〃三日間〃というのは川柳です。判りますか」

「ウム、だがね、わしにすれば三日間の方も俳句だと思つとる」

「やけつぱち俳句ですよ。随つてこゝで私の結論を出しませう。人間非常に強い体験なり、それなりの深い感情にとらわれると、いかなる人間も俳句のつもりが川柳になつて飛出してくるということです。痛烈な心境は俳句よりやつぱり川柳の方が直接的ですよ。」

意あつて言葉足らず、私はこれだけのことを言つて詰めかけた来客のため余儀なく席を立つたが俳人万木センセイこの瞬間まことにイヤな顔をした。

ちようど昨年夏のこと、この伴睦氏と一ぱいのみながら〃伴睦放語録〃というのをとつたことがあるが、その際この赤つ鼻の先生は、川柳というものをサツパリ認めない、俳句大明神サマサマの口吻で、てんで私の川柳論なんかどこ吹く風といつたものだつた。私にすればこんなときぐらいにしか、このセンセイへの反撃はきかないと、かくは三日議長の俳観侵略の挙に出たという次第である。

柄にない椅子につきけり三日間—これはまさしく時事吟である。伴睦氏が自身詠み人なら、興趣は一層深い。この句に傍題をつければ、一九五二年度の得難い世相の川柳記録となるだろう。

雜　想

戸倉　普天

エバーグレーズ、エバーホワイト、サンフオライズなど今夏の簡単煮として可なりの宣伝と流行が見られる様である。もと〳〵これ等は綿布に恒久性の押型を

あはてものお前そつくり夏の雨　同
おちぶれてあまりにつめたき冬の雨　同
PTAプリントへ又寄附だつか　貝塚市　西川　道人
スナップへ迷惑な娘と撮られてる　同
四十の恋心配で〳〵　同
ドシャ降りの奈良へ修学旅行着き　貝塚市　河楊　梵鐘
処女いとし水蜜桃のうぶ毛して　同
臆面もなくパンパンは村を往く　同
風邪氣味の社長の印がゆがんで居　大阪市　保田　喘六
二人では食えそうもない罐を切り　同
片道は大股で行く若さなり　同
安宿に肩書が泣く旅費稼ぎ　出雲市　佐藤まさる
亡ぼした上に恩給までとる氣　同
急停車西瓜が轉げたあわて様　同
感触の客降りて煩悩も去りぬ　岡山県　沖一糸
さそわれてなぎさで素肌まで見られ　同
たわむれる鯉の上にも立つ波紋　同
二十四時他人の様に帰つて來　岡山県　栗正佳目夫
世の人におしまぬ汗をみとめられ　同
よるべ無い我が身さ犬も遠くほえ　宮崎市　野口卯之助
慰藉料へとかく他人が智慧をつけ　同
税務署もさじを投げたかそれっきり　岡野風の子
米代を心配しい〳〵パーマかけ　岡山県
月が出て又行水が向きをかへ　同
氣短かが損とわかつた齢になり　大阪市　飛鷲　春風
結婚をすると云う筈孕み居り　同
國定忠治が洗濯してる小屋のヒル　東京都　田中　稲水
お嫁には行きませんわと草ちぎり　同
あの人も母が亡いのか淋しい句　小西　雄々
学校は試験と知つた通勤車　同
臍繰りは下着一枚殖えた丈　大阪府　田中　秋芳
下戸の身で藝者上りの妻を持ち　同
浴衣着て場末の映画見に出かけ　大阪市　竹内花代子
北浜の恋はボートでするときめ　同
療養に事缺かぬ方先に死に　岡山県　岡田　青果
出まかせなわが説教がとてももて　同
眼のごみがとれず一駅程を過ぎ　大阪市　西川　一舟
夕立に貸ボートからぬれて來る　同
茅葺の家が写眞に出る出世　今治市　黒川　秀義
我先にチップのほしい憐すする　同
水都祭今年は夜学の窓で見る　吹田市　橋本　幸男
金が出來三面記事を寒う見る　同
歓迎をうける立場の席につき　長崎県　戸川　晶子
メニューヒンの眞似割箸でやってのけ　同
約束の橋はほたるの火がきれい　大阪市　伊藤　定美
ミシン踏むリズムに恋はなかりけり　同
宣傳車街の暑さを掻きたてる　岡山市　津田麦太楼
遅トマトジャンバーを着たように熟れ　同　星野　侑正
役得の有無も仲人きゝ返し　島根県　同　川西　去水
看護婦の白いマスクよ黒い瞳よ　同　太田　一波
ヒドラジッドを待ってただけの命です　赤穂市　同　岡本　元馬
牧助の汚職の蔭で二号食ひ　同　迫田美婦適
夕立で市の撒水車ほつとかれ　岡山県　同　渡辺あきら
遺言に背いて迄も株を買ひ　同　同　戸田　悦子
一人前になつた長男の革鞄　高知市　同
上席に座り流行歌を知らず　同
申訳ほどに重ねた夏布團　岡山県
賃上げへ用もないのが賜暇を取り　同
祖母の愛とう〳〵不良にしてしまい　福岡市　岩田十三楼
德望をボスに見立てる人もあり　同
度し難き巡査へ芝生青々と　玉野市　渡辺あきら
積木する子の根氣には負けました　同
でたらめにやつた料理をほめられる　大和高田市　戸田　悦子
頑固そろ〳〵折れた頃には働けず　同

附けたり、洗つても縮まぬ加工をしたり、数度の洗濯にも其純白さを失はぬ加工がしてあるだけの話で、綿布の特種加工品として昔から我国にも行われて居たもので、必ずしも新しい技術とも言えないであろう。只近来外国の模倣そのまゝに其文字まで外国語を用いて新しがり屋を誘惑した処がミソであろう。

○

ナイロンだのビニールだの、捲縮スフだのダルのスフだの、所謂化学繊維の汎濫も物凄いが、何れにしてもこれ等が綿布に取つて代るまでには立到らないで、却て綿布其ものを益々実用的な重宝なものにセリ上げて行く様な感じがあるのは独り筆者のみではあるまい。

○

嘗ての日本は婦人の長袖を半分に切らせたり、やがては膝切りの筒袖にモンペイを着けさせたりした。斯くて「国民服を着て籠抜け詐欺をやる者はあつても、紋付を着て悪事をする者はない」などと皮肉な嘲笑を浴びせた者が表れた事を想ひ出す。

○

終戦後六、七年繊維の加工技術の進歩、化繊の発達に伴つて婦人の服装も漸次一変、忽ち戦前の姿を凌ぐに至つて今夏など殊更女性を美しくした事が目立つて来た。蓋し之れが平和の真の姿であろう。さる作家は「女性の美しささへあれば真も善も宗教も政治も何にも要らぬ」とさえ言つて居る。古い昔のマホメットさへ「我愛するものは女性の美と香水のみ」と言つて居る位である。

○

けれどもビニールのレーンコートで派手なスカートの大柄が透けて見えたり、

商魂の腰を曲げてる電話口　貝塚市　永吉　喜好
道草を嘲けるように降る時雨　同　戸田　嘉一
ひらいやの瞳に牛乳を飲む小犬　大和高田市　同
水銀が昇る扇子の手もだるし　大阪府　岡崎　白蛾
アベックで旧師に逢うた目のやり場　同　大塚美能留
人前も新妻とんと氣にかけず　岡山県　同
前科ある兄あり良縁諦める　同　松元　利行
もう地腹と云えなくなつた妻の腹　大阪市　同
特賣場スリ万引も共の中に　同　稲吉　佳晶
ピストル魔案外樂に逮捕され　岡山市　同
かりそめの恋も樂しきネオンの灯　同　永田都詩子
手を合すくせ長病みの母の皺　大阪市　同
牧水に共鳴する日淋しけれ　同　石本山茶花
五十路近く女若さを恋しがり　京都市　同
理があつて泣く子に泣いた未亡人　同　國枝　朴仙
もうそんな時刻か寺の鐘が鳴る　岡山県　同
学歴の相違が僕を落付けず　同　竹林十三呂
行商の汗の匂いのする財布　大阪府　同
夕立へ迎える妻が欲しくなり　同　井上　吉造
相合傘男の方へしずく落ち　京都市　同
月賦なら買うてやりたい親の慾　同　堺　不漁
噂などヘッチャラ女四十過ぎ　岡山県　同
行水を見せて旦那を泊らす氣　同　丹波　太路
はたこの浴衣で社長もパチンコし　同　山田　陽々
生き別れした母思ふ娘が二十　堺市　同
走り乳暫らく捨てし兒に飲ましめ　石川県　同
勘定を済ませた後の寂しさよ　同　野中　稔一
湯の町で会へば社長も女づれ　貝塚市　同
会社から見舞が來たら馘首のこと　同　本田惠二郎
暑中見舞書く氣で居たが秋の雲　同　同
パパとなり日日の汗にも張りがあり　岡山県
初対面の時はあんなに氣どつたが

宝くじ破つて捨てるビルの窓　米子市　勝田　正郎
講師もう肩書脱いだ酒を飲み　同　若山　圭草
母の下駄だまつて履いてこけた音　京都市　同
誠実さ買はれ倉庫番にされ　同　有楽子改め乙倉　一星
押賣りへ笑顔したのでつけ上り　岡山県　同
どうせ買う土産美人の店で撰り　京都市　鈴木加代子
酒の幸茶の幸京はよいところ　同　吉原　紅月
親不孝附箋で届く母の文　兵庫県　同
土用波恋のボートへ遠慮せず　同　篠原古戦場
儘ならぬ恋も承知でする若さ　金沢市　同
予備隊であつても祖母は案じられ　同　森川　東南
記念写眞これは宿屋の女中だよ　岡山県　同
満月へ噴水遠く及ばざる　同　東　初奈里
御意のままになりますつもりのウインクし　貝塚市　同
入院をして居て暑中見舞出し　同　太田　又州
呼出しの電話へ妻の下駄を借り　岡山県　同
泥坊が素足であつた迄は知れ　同
瑞八が時計の紐にぶら下り

古橋敗る

飛魚は飛ばず放送涙声　鳥取県　日置　文笑
汽車で見る我が家は一寸小さ過ぎ　同　森本黒天子
アチャラ製の煙草あんちゃん軽う出し　大阪府
氣休めに妻へ信心任せとき　同　小林　夢介
人権を盥の中で獲得し　岡山県　同
街頭録音うちわの音もする　同　和歌山県那須　好二
新妻にボーイフレンド多すぎる　同
いゝ歳をからげコケシを妻蒐め　同　富永　靜臥
看護婦のしとやかなのをほめちぎり　高槻市　同
往診に年ですからねと暗示され　同　多久和聖一路
相媒介しませうと笑む未亡人　出雲市　同
逃げて見りや故郷はせまい町だつた　同　奥野　喜久
デパートで買うた云へば氣にいる子　貝塚市

ツルツル光つたショールダーバッグを右肩にぶらさげて巷を潤歩している姿、風呂敷の外から弁当殻と林檎の一つ二つが透けて見えるのを携えている格好など凡そ女のおくゆかしさから縁が遠いと思う

ましてやビニールのネッカチーフにビニールのサンダル靴、真赤なショールダーバッグなど、これ又パンパン族かと疑わしむる思いがある。「ペンキ塗り立て御注意」を思わせる様な厚化粧に大きな、濃い口紅等は一入、気の弱い「男性近寄る可からず」の感を抱かせるのみならず誠に暑苦しい風情がある。近来爪を赤く染めたのが幾らか少くなつて来たのは稍助けられた様な気がするのである。

昭二七―八―一五稿

一年生に帰るの弁

吾郷玲人

「川柳雑誌」も三〇〇号を突破して誠に感慨無量の気持である。私が初めて「川柳雑誌」を読んだのは、たしか未だ小学校に通つていた昭和元年……と云つても詳しくは大正十五年頃だつたと思う。綴方の時間に俳句を作れと云われたが、私の作つたのは「川柳」になつていると云われた。然し先生が「中々良く出来ている」と云つてくれたのに気を良くした私は早速其の日から川柳と云うものを勉強して見たい気持になり、地方新聞の文芸欄の広告で大阪の川柳雑誌社と云うのを知り早速一部送つて貰つた。

それを学校へ持つて行き先生に見せると、不思議な事に、先生の友人で籔川郡高松村の「伊藤緑之助」(現尼緑之助)氏と云う名前の句があり、先生も大変興

金魚いま炎のやうに逆立す　同
敗北の惨さ意地も無駄と知り　出雲市　久家代仕男
移轉先貼つて名殘の窓を閉め　貝塚市　同
子供つてこう泣くものか妻の留守　貝塚市　多炭　若柳
元大佐そろ〳〵ひげを延ばそうか　岡山市　同
角帽を脱げば優しい息子なり　岡山市　河田　五風
逢曳の氣分半分蚊が壞し　貝塚市　同
わたくしを朱色につつみ陽は沈み　貝塚市　小島さざす
スイートホームの見本のように家があり　愛媛県　同
虚僞の世に妖婦めくのも寡婦故に　愛媛県　岩川　寛虚
停年の辞令に眼鏡のづれを知り　同　岩垣日本村
汽車にするやつぱり昔氣質なり　大和高田市　同
易学の指紋を刑事見て嗤ひ　岡山県　古谷　馬洗
二次会は提灯持ちと知つて行き　同　同
陳情に考慮とは物が欲しいの意　大阪府　平田　一色
呼出しの甘い電話も呼びに行き　大阪府　同
眞心がこもり押し花薫りする　大阪府　小林　黒坊
六三制野球ばかりを上手にし　同　同
名を問えば白衣の笑顔ついと逃げ　愛媛県　別府　狂一
学成らぬ帰省に女連れて居り　大阪府　藤田　博人
望まれて來ても変らぬ嫁の地位　愛媛県　成田壽々女
ブランコへ一―二―三―と母若し　大阪市　山名　小豆
パチンコへ母子で這入る日曜日　大阪府　松下　蘇水
雨宿り義理に若干求めてる　高知市　鈴木　風鈴
ダイヤルは病む子の趣味に任し切り　大阪府　西川　惠風
鰻釣りすぐつれるよう子は思ひ　大阪市　多田　穂波
これは〳〵お世嗣ですと如才なく　山口県　中谷葉栄子
夕涼み坊やもゆかた着ると云ひ　大阪市　青野天下堂
駅辨の早口になほ暑うなり　愛媛県　永田六竜子
ウインクも派手な置屋の十五の娘　大阪市　向田妻楊子
辻妻の合はぬを妻の逆はす　下関市　池内　両成
金あればなど思う頃父恋し　貝塚市　大阪府

快談をよせばよかつた泊られた　岡山県　岡本　薫翠
缺食までして痩せたいとはひたむきな　貝塚市　岸　麻沙留
生字引几張面なる鍵をかけ　大阪府　浜井　眞砂
女事務惣氣をそ知らぬ顔で聞き　貝塚市　谷口　流水
マスターと言はれて昔恋しがり　大阪府　大島　荷村
こんな事良人に云へず泣いた夜　岡山県　難波　陽炎
母に似て父の美貌に遠ざかり　津山市　菱川　正美
退院はうれし荷物の多い事　大阪府　生島　秀翠
トラックの音ものすごい村の富　熊本県　鹿本　実信
角帽で故郷へ写眞送つて來　岡山県　國正田吾作
グローブを持てばクラスで一二とか　大阪市　佐野　牛歩
強盗も彼の程度なら泣寢入り　岡山県　難波　鴻峰
揺れ止んで女俄かに姦しく　大阪市　木谷　芒夢
借金が済めば税金控えたり　大阪府　大村　石三
先生の自轉車があるパチンコ屋　岡山県　松村　怠坊
水監へ百合が香るも夏の部屋　京都市　佐久間折草
パラソルの影をオールがかき乱し　岡山県　光好三四詩
爪彈きで水打つ庭に待つ今宵　京都市　高岡　薫
けちくさく飲んで女給に見くびられ　大阪府　小沢　文茶
二十四時電話が医者を泣き落し　岡山県　戸川　千流
見る阿呆踊る阿呆について行き　鳴門戸　大塚五厘棒
若鮎のやう看護婦はピチ〳〵し　大阪府　小松　月皎
避姙法産婆も講習受けて居る　石川県　桑山　とよ
はるばると來て初孫の子守する　大阪府　難波　櫻天
百姓をさせて女房の泥臭く　岡山県　池田　古心
誰でもが恐妻家だよと顎を撫で　貝塚市　小田　柳叟
袖の下現れてくる通信簿　大阪府　川西　天敷
弁当だけ運ぶにゃ惜しいカバン持ち　大阪府　神谷　眉山
二言目女は金の要る話　大阪府　井口　雅樂
逢いに行く心見すかす母の勘　大阪府　松田　巨松
せめてものキリギリスなど子に持たせ　大阪府　友田　諷士

味を持つて、その「川柳雜誌」の見本を先生に差上げてしまつた。（後になつて惜しい事をしたと思つた）それから暫くして又一部送つて貰つたが、当時の発行所は、たしか住吉区平野西之町と記憶している。当時の句に、山雨楼氏か、緑雨氏の句に「平野から通天閣の灯が見える」と云う句があつた事を思い出してなつかしく感じている。

そうして間もなく松江へ奉公に出て「松陽柳壇」の米村あん馬氏には大変お世話になり、昭和四五年頃、久方清宵（後に慕秋）等の「川柳雜誌松江支部」結成には同人の一員として加わり末席を汚していた。然し二十代の若さの人達ばかりの集いであるだけに、句も作るが、又飲む事にも熱心で広江天痴人君等との間には始終意見が合わず支部幹事は半年毎に替り、昭和十年頃には、全く熱のある人は生れなかつた。それに較べて獲川支部（現出雲支部）は、尼緑之助氏のたゆまざる熱と努力がつづけられて今尚、若き新進を育成して居られるので常に敬意を表している。

標題より大分脱線して来たが、その松江支部消滅と同時に来阪して、松江と生活環境や、零囲気の替つた大阪では、随分戸惑いして川柳どころではなかつた。

間もなく戦争が苛烈になり「川柳雜誌」も休刊になつた事を聞いている内に、昭和二十年頃、四ッ橋近くの本社句会や、御津八幡宮の句会に二三回出席したが、私の松江で学んだ作句方法は全くゼロになつてしまい、後から〳〵出る新進作家におされてしまつた。そうして本年五月三日の講和記念句会へ七年振りの

一路集

涙

正本水客選

涙枯れ切れば女は恐いもの　日本村
小使銭上げれば母は涙ぐみ　とみ子
嫂の涙で家出引きとられ　摩天郎
遺家族に涙出させて当選し　重郎
独房へ母の涙が瞳に残り　大方
悲なく帰つて母の涙見る　陽々
俳せの涙を妻になつて知り　三思楼
涙もろい叔母で一寸行きにくゝ　茶々
娘の涙嘘か本当かよく流れ　ひかる
見てならぬ涙へそっと瞳を外らし　芳仙
その頃は知らずに過ぎた師の涙　怠坊
男じあないか涙を拭けと叱つた　朴仙
涙出る蚊ヤリの中でビール飲む　昇棋
改心の頬の涙を拭いてやり　斗志
年頃は化粧崩さぬように泣き　唯司
涙なんかセンチだわよルージュの娘　五風
涙ぐむ顔になつたで話題変え　粗粒
お帰りと言えず涙が出るばかり　一糸
母の膝ぬらし気の済む娘の涙　忠美
涙もろい心が邪恋のもとでした　東南
壁向いて涙のあとへコンパクト　牛歩
迷い子の涙が潤れた頃わかり　山雨楼
お悔みもまだ云わぬうち涙落ち　良坊
泣かされた映画冷たいソーダ水　卜占
涙になつてからの話はくどくなり　夏六
涙まで出して女の仰山な　鉄児
同窓の弔辞涙の環切つて　代仕男
民生委員涙に慣れた口をきゝ　十九平
幸福な涙で過去をふり返り　天
葉光軸
鐘を突く余韻へ涙ふと溢れ　光男
捨てるのは犬の子妻は涙ぐみ　美能留
小説へ女泣きたい丈を泣き　七面山
涙あと一層美人らしく見え　湖月
嬉しさは涙もふかず客に会ひ　同
涙ぐむ訳がないのに女だね　夜潮
窓をうつ雨の滴の涙に似　光郎
涙ほどには反省してぬなり　美秋
あれほどの涙の過去をもう忘れ　夢生
涙一滴もう許す気になつており　同
涙まで出して笑える十八九　文子
仲裁も女の涙持て余し　葉留路
死化粧してやる方の化粧はげ　満年
決別へ見せぬ涙がものたりず　三葉
慰める人があつての涙です　若柳
同情は涙流しただけのこと　正郎
あくびした涙子供に見つめれ　有楽子
涙など忘れた様に母は生き　桃々
涙ぐむ妻に乙女の頃の夢　幽玉
慰めるかわり女は涙ぐみ　英子
云ふことも言へず涙があふれて来　方眠
隠れんぼの型で一人子泣いている　花村
ウインドに星の涙が光つてた　同
泣く涙あれば仏に佗びてやれ　梅里
涙線を開つけばなした泣きっぷり　流水
涙ばかり流して話はかどらず　同
痛いかと問えば涙を横に振り　同
涙もろいだけで頼りにはならず　夏六
留守居の子ほゝに涙のあとがあり　一善
跡取りが涙もろいで案じられ　夢介
夏やせをしたなと云えば涙ぐみ　茶々
子の喧嘩涙を拭いた方が負け　莽花
ぎりぎりの暮しに涙もろい性　水堂
大粒の涙は嬉しい眼にたまり　雄々
涙もろい母を泣かせに客が来る　悦子
軸
怒つてる人の涙を見てしまい　水客

百貨店

丸山弓削平選

軽気球百貨店はこゝにあり　迷羊
百貨店で同じ人に三度会い　とみ子
贈答の包み紙だけ百貨店　満佐志
百貨店の恋ネクタイの山が出来　七面山
デパートで千円札の夢が消え　三思楼
俎を買いに三越まで出かけ　十九平
百貨店買いそな顔で見て歩き　一善
デパートでまず買物の下見する　同
デパートを最後に修学旅行団　卜占
お見合をさせデパート見て帰り　大介
百貨店で家出半日ほど暮し　山雨楼
気嫌よく百貨店から戻つて来　水堂
デパートの前で軒店刃向う気　鉄児
百貨店目の正月を堪能し　信雄
百貨店何処かの国へ行つた様　同
百貨店出口で「光買うただけ」（大阪）　牛歩
百貨店売場を替えて夏にする　同
百貨店ぶらりと行つてぶらり買い　良坊
空財布のまゝで大丸高島屋　美秋
風船をもろて出て来た百貨店　梅里
贈り物百貨店まで決めに行き　怠坊
百貨店まず休憩所を探し　悦子
結局は買わず大丸高島屋　梅里
百貨店出てから夫婦もの言わず　谷水
今別れ又デパートでめぐり逢い　十三楼
デパートで買わぬ旅の気が済まず　夜潮
デパートのトラックが着くバラの家　葉光
デパートの紙に包めば東子でも　薫
風呂敷に包まず百貨店を出る　悦子
デパートで衣裳の柄をハズが定め　夜潮
いつ弁当食うのかデパートの昼　莽花
迷子にしてまで百貨店で攫り　弓削平

出席は全く勝手違いの感じで、句らしい物は全然出来なかつた。然し、なつかしい故郷の土を何年振かで踏んだように、嬉しかつた。

私も未だ四十に足をかけたばかりである。又元の一年生に帰つた気持で、一所懸命作句に精進したいと強く念願している次第である。

飛・燕・往・來

蛭子省二氏（愛媛県）より

—略歴—

貴誌九月号拝受、御厚情感激有難き事に候御編輯頗る御迅速、時節柄一層の御骨折りに察上申候貴詠拝誦、御健吟敬服。御親友の御永眠は御寂しくあらせ玉うべし、やはり古稀迄は容易ならず私の友達も最近六十台にて亡くなるお方多く候然るに年中病む私が六十六、勿体なく候山雨楼さん御良好とは喜ばしく候御同人及投句者の多きは結構に候九月は川柳翁忌月なれば私の病頭にて句会を催し賞うつもり脳貧血併発症全弱発作込み候酔み如船なべくにンの持てち候選く為に孝舎もに田の騒く（九月二日）敬白候々。

山銀の瓶

大阪市天満区長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話 堀川四四七番

源義經（二）

富士野鞍馬

治承四年（一一八〇）源頼朝（三十四才）は伊豆の石橋山で、源氏再興の旗上げをした。その十月、清盛は孫の維盛に大軍をつけてこれを討たしめたが富士川を狭んで頼朝の軍と対陣して、水鳥の飛ぶ音に驚いて逃げた話は歴史にも記されている。

源氏方富士川以後はかまがきれ　（タル四）

平家方寝耳に水の鳥で逃げ　（〃九三）

等古川柳はこれを多く詠んでいる。また別に、

義朝の弟義賢の子義仲は、治承四年四月に木曾から起り、北國方面に勢力を得て、壽永二年（一一八三）四月には京都を占領し、平家を西國へ追拂い朝日將軍となつた。

六波羅の夢は朝日が出るとさめ　（タル四九）

ところが義仲は京都で專横を極めたので、後白河法皇の宣を奉じて頼朝は、弟範頼、義経に六万の兵を持たせて義仲を討たせた。その時義経は宇治から京都へ進み、宇治川の合戰には、佐々木高綱、梶原景季の先陣爭いという有名な話が傳わつている。

梶原を二度だましたと佐々木いひ　（タル九）

遂に義仲は粟津の松原で遠矢にあたつて三十一才が最後であつた。

なから半じやくで仕舞つたは義仲　（タル二九）

義仲に追われて西國に走つた平氏は、壽永三年二月、再び勢力を得て京都を取もどさんと福原（神戸附近）へ引かえし、此処に拠つていたので、義仲を討つた範頼、義経の軍は、生田森と一の谷との二道から攻めて、平氏を讃岐の屋島へ追つた。義経鵯越の戰略は後世まで賞められている。古川柳もこの辺から義経の句が多く見える。

一の谷楽屋新道からまわり　（拾六）

一の谷巴豆芒硝でおつくだし　（タル四九）

一の谷義経短慮功をなし　（〃一五七）

鞍馬育ちはからめ手も馴れたもの　（〃一一〇）

六波羅で負けて裏目で又やられ　（〃八三）

一の谷六の方からさかおとし　（〃四〇）

源の会稽山は一の谷（〃一〇四）

この戰で義経の部下熊谷直実は、逃げおくれた平敦盛（十六才）の首を取つたが、浮世の無情を悟り出家したという物語も景物になつている。

熊谷はまだ爽のいらぬ首をとり　（拾五）

直実は不承ぶしように高名し　（〃六）

ちかづきになつて熊谷首をとり　（タル十一）

熊谷は扇をさして太刀を抜き　（〃五三）

後ろから若衆を招く一の谷　（〃一四一）

花は散り青葉は残る一の谷　（〃一〇六）

青葉に添えて爽の入らぬ首一つ　（〃一一九）

熊谷は勝つてかぶとの紐を解き　（〃六一）

故村上源氏氏の句碑　（伍健氏筆）
—愛媛縣津倉—

柳界展望

▼本社川柳忌句会は九月六日に繰上げ、午後六時から下寺町の光明寺で開催した▼大阪逓信病院川柳会は九月十三日午後二時から三階会議室で開催▼交通局秋季川柳大会は九月十四日午後一時から交通局病院五階サンルームで開催盛会だつた▼川雑浜寺病院支部一週年句会（大阪府）は九月十八日午後四時から院内で開催▼川雑大阪南支部句会は九月廿六日午後六時からアベノ橋近畿食道街直営食堂で開催される▼西日本川柳大会（岡山県）九月二十一日午前十時から弓削川柳社主催の下に弓削小学校講堂で開催▼南海電鉄川柳会は九月廿九日午後五時半から粉浜の親和寮で開催される▼南区医師会杏林川柳会は卅日午後七時半から一哲居で開催される▼大研子を偲ぶ川柳句会が白柳子氏等によつて八月三十日後六時から玉造のどんどろ大師で開催、古い柳友が顔を見せた▼南区医師会文化部婦人部主催松井宗又師指導の茶会が川柳部の応援で八月卅日夜、中島小児科医院後庭、路郎句碑の前で催され、会場内に二十四五の川柳行燈が掲げられ大いに興をそえた。句は川柳部、画は南画部の人々の作。以上何れも路郎主幹出席▼川雑姫路支部では七月五日に書写山へ一泊がけの吟行を催された▼川雑岡山支部句会は九月十四日午後一時から松竹座裏の山陽旅館で開催▼豊国川柳社（岡山県）では九月五日午後七時から中谷仙坊居で例会開催▼第三回文化祭青森県川柳大会が藤崎町公民館主催、川柳紫柳社後援の下に九月七日午前九時から藤崎町振興院で開催▼古川柳研究会では八月三日東京新橋藤前工業会館で第百十五回古川柳の会を催した▼京都川

その後は衣で通る一の谷
（〃三六）

黒谷に坂東声の僧一人
（〃一五二）

等多く古川柳に詠まれ、直実は京都黒谷で僧になり、蓮生坊と改め、郷里熊谷へ帰つて蓮生寺を建てた。

続いて屋島の戰となり、その時義経はあやまつて弓を流し、危きを冒してこれを拾つたという所謂「弓流し」の話題がある。

弁慶に一本かりて弓をとり
（拾五）

八郎は強弓九郎弱い弓
（タル四九・八九）

義経の弓は荒布にひつかかり

また那須の與市（十七才）が扇の的を射落した誉れの話も琵琶歌などでうたわれている。

二本目は与市もこまる扇かな

この戰ではいろ〳〵の話題があり、佐藤継信は義経の身代りになつて教経の矢にあたつて忠死し、

継信を損にしておく勝いくさ
（拾六タル三）

継信も十が九つあたらぬ気
（タル八）

あと王手らしく継信討死し
（拾五）

景清、三保谷四郎の鍛引も有名な話で、腕の強さ、頸の強さが芝居や舞踊になつている。

景清は尻餅四郎つんのめり
（タル四六）

三保谷が腮へめり込む忍の緒
（〃一六六）

義経に追われた平家の軍は西へ〳〵と逃れて、遂に長門の壇の浦を最後として、全員海へ投じて亡び、女は遊女、男は蟹になつたといわれている。

一門は蟹と遊女に名を残し
（タル四三）

これは壽永四年（一一八四）三月のことで、教経に追われて「義経八艘飛」の武勇談がある。

判官はどれだと笏で陸へさし
（タル三）

三月と五月のような壇の浦
（〃二九）

義経は八艘飛んでべかこをし
（拾五）

飛んだ身のかるい野郎と能登守
（タル四四）

義経さん何か落ちたと能登守
（〃一〇一）

七艘は無念八艘ほつと息
（〃一六二）

この時義経は二十六才の若盛りであつた。二十五年前に父義朝が長田忠致に浴室で謀殺されたのに対し、今平家一門を海の藻屑としたことを、

湯の意趣を水でかえすは源九郎
（タル三）

湯の意趣を義経水でかえすなり
（〃三八）

源氏方湯の返報に水で勝ち
（〃四五）

等と詠まれ、ふところに抱いていたのにほろぼされ
（拾五）

当時生れたばかりであつた義経に、平氏は亡ぼされたのであつた。

壇の浦の戰がすんで、義経は清盛の二女徳子、建礼門院を助けてうまくやつたことは、「壇浦快戰記」という漢文本になつていたり「源平盛衰記」の大原御幸にも書かれてあるので、

義経も母をされたで娘をし
（末初）

門院をひつくりかへしたが落度
（〃四）

という古句もあり、これらが原因で頼朝から睨まれることになつた。

柳社創立四十週年、關華、二山、千枝、謝恩記念大会が京都川柳社主催の下に十月五日午前十時から京都市下京区間ノ町正面下ル枳殻邸で開催本社の麻生路郎主幹の講演がある。会費百円▼三菱電機紅菱会文芸部青蛙川柳会（尼崎市）九月八日後五時半健保会館階上で例会開催▼愛媛県下納涼交歓川柳大会は八月十七日に津倉川柳吟社主催で開催され盛会▼桃太郎川柳社（岡山県）では八月廿三日に例会開催▼大阪市文化祭市民川柳大会（主催大阪市教育委員会、協賛大阪各川柳団体、後援毎日新聞社）は来る十一月十六日午前十時開場（十二時半席題締切）毎日新聞社講堂で開催される、兼題「読者」林一六氏選「商人」武部香林氏選「工員」坂濱風氏選「荷」岡橋宜介氏選「顔」川村伊知呂氏選「裏門」中島生々庵氏選（各題二句）の外席題四題、浜田吸露、吉村翠我、岡田弦一郎、丸尾潮花氏等の選、各題毎に官製ハガキ一葉の事（住所氏名明記）締切十一月五日前限り講演は「かえりみる」掘口塊人「川柳は何のためにある」岸本水府「非凡」麻生路郎の三氏。来会を歓迎している。兼題投句先は大阪市北区中ノ島教育委員会市民川柳大会宛▼中部日本作家協会（名古屋市）の川柳忌大句会は九月廿一日午後一時から若宮神社で開催▼しなの川柳社十月例会は十八日午後七時から松本市新伊勢町三枝薬局鎔料部楼上で開催▼つやま川柳社（津山市）九月例会は廿四日夜

杏林川柳会妙寺町吟行　紀ノ川の船遊び　―その一部―

不朽洞の契煙室

狸の親類

前田伍健

山陽新聞四国支社の川柳大会で高松市へ二泊三日の旅です。川柳が済むと例の狸の話をやれ〳〵と、まるで狸の国から来て狸に親族でも沢山あるような、督促ぶり。私の宿の四番町自治会館の裏が屋島狸と共に有名な高松浄願寺です。そこでムニャ〳〵と浄願寺の白禿たぬきを呼び出して、聞くと「近頃人間の方が上手に化けるので狸の方が遠りよ、しています」これでおしまいドロン〳〵。

椿のように赤く

水谷鮎美

いくらかの水を牝牛がのめば牛乳になる、悪魔がのめば誘惑の囁きとなり、善人がのめば一日一善となる、養老の滝の水は酒となる。小生の最も好むところ、慈雨は土に泌む椿が吸へば真赤な花が咲くこのよい水をのまれた山雨楼師は臥床即健康と成られ柳界に更に雄躍される奇蹟を信じお祈申ます。

飛燕往來

中島鉄洲氏（鳥取県）より

——路郎宛——

先生大変御無沙汰致しました。復興に明け復興に暮るで新都市計画の実行に当り市民の各層共にヤツサモツサです新道路の面積の一割五分に相当するとの事で各自の持分から（登記公簿面）一割五分から三割五分を県で買収する。且つ旧寸法の六尺三寸一間が六尺の一間に訂正されるので差出した空地が各町内に二百坪以上です。其空地は払下と緑地帯にする目的。私の住宅も間口三十六尺が三十尺九寸になり東寄りに二間移動致しました。私は協力の意味で鳥取県でイの一番に移動致しました。県当局も喜んで居ります。だが少少不利と思うと異議申請や、不法建築に対する中止命令で鳥取市の騒ぎは他から見ると馬鹿〳〵敷く見える事と思います八歩も安定致しました。耕民も近々に建築に着手致します。土地境の仲裁に三日三晩を費して曲りなりの解決致しましたが、老妻に叱られて居ります。喜んでもらえぬ仲裁はするなと。

九月八日

阪田良坊医博（下関市）より

——路郎宛——

まだ〳〵暑中見舞が出したい様な感覚を感じます、こちらは今日の日中はかん〳〵照りで暑い事でした。大変立派な御揮毫を三句もいたゞいて感謝しています。院長室へ来室者一日約五十名（内半数は院内職員）として三日間で大体禁酒という事のみに対しては「今は早や命縮める酒となり」が一番良いと異句同音でしたが、「院長をもみくちゃにする芸奴が居」が一番皆んなに受ける様でした。然し実際は「院長の椅子だけあけて待つてゐる」の場合が多い様です。取敢えずお礼まで。

九月七日——

七時から美濃町晴の助居で開催▼長崎川柳社は九月二十日午後六時から大井手町三六山口十起居で開催▼静岡川柳社川柳忌句会は九月廿三日夜六時半から本通六、西教寺に於て開催▼川柳きやり吟社十月句会は一日午後六時より東京都千代田区神田須田町柳森神社で開催▼ふあうすと川柳社九月句会（神戸市）は十三日午後五時半から生田神社で開催▼川柳社人社十月句会は十九日午後一時から仙台市大学病院前丸藤店階上で開催▼川柳宮城野社、河北新報社共催の宮城県下川柳大会は九月二十八日午前十一時から仙台市北三番丁外記了角建設会館で開催▼川柳研究社八月句会は十七日後五時半から東京都日比谷神社社務所で開催▼川雑岡山支部では川柳に理解をもつ三木岡山県知事から知事盃の寄贈をうけたので、毎月の例会の最高点者に贈ることとしたが、右は永久持廻りとし一年を通じ知事盃獲得数の多い者に別のカップを贈ることとした。これが為に同会の張切方は非常なものである。▼大村新蟬氏（東京都）は五月廿九日に死去されたと、謹んで悼む▼福田山雨楼氏が川雑岡山（支部会報）に「吉備団子」第三集考現学を連続八回に亙つて執筆され九月号で完結した。

川柳行燈と生々庵居後庭の茶筵

向つて左から二人目安岡技師、三人目生々庵主・土博郎

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定　▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社川柳忌（大阪市）

九月六日　午後六時　於光明寺

作句シーズンを迎えて鬱蒼とした光明寺の後庭にはもう虫が鳴いている。縁側まではみ出した盛会振りである。鮎美氏の句評は岡山県下の柳人鉄児、大介、一糸三氏の句を挙げ、試みに助詞や動詞の活用を変更して検討されたが、結局原句通りの字句が最も適切であると説明された。当夜は岡山市の不朽洞会員服部十九平氏が東京からの帰途出席され大阪の不朽洞会員等と久闊の挨拶を交わされた。路郎師の柳話は柄井川柳の略歴を述べ柳翁忌を反省の日として今後の川柳に新らしい境地を作つて欲しいと大いに若い柳人達を激励された。席題、兼題の披講後北川春巣氏は本年二回目の不朽洞賞優勝カップを把持された。閉会九時

出席者＝路郎・古方・文蝶・幽王・けい一三夫・孝一・嘉一・悦子・正司・わたる・春柳・水堂・生々庵・都誌子・喜久堂・玲人・十九平・ひろし・花村・紫香潮花・摩天郎・ゆづる・眉水・梅志・扇子仙・夢裡・沐天・雅巣・芒夢・以兆・淡舟・黒天子・紅村・蟹面坊・落帚・六竜子・恒明・帆加夫・牛歩・胡蝶・方眼三司・鮎美・栞・万楽・妄夢・貴山・淳愛論・へとち・一歩・梨里・葭乃

兼題「楽譜」　麻生路郎選

上手下手同じ楽譜でこう違い　水堂
フォルティシモ楽譜も飛ばんばかりなり　春巣
一人坐す楽譜の上に蛾がとまり　胡蝶
楽譜を友に浮草に似たる旅　恒明
爪弾も良しなつかしむ佐吉の譜　文蝶
三味線を楽譜で習う四十過ぎ　万楽
家元の楽譜で舞奴弾かされる　潮花
楽譜抱く芦屋令嬢に夢があり　幽王
また金か娘の楽譜高いこと　扇子仙
ハイヒール楽譜追つてる音を立て　七面山
本譜未だ読めぬ頃から鐘三つ　玲人
式典歌楽譜に金の文字を刷る　正司
ありたけの声を楽譜に投げつける　日本村
今宵亦くらしのための楽譜持ち　生々庵
ヅカファンになつて楽譜も持ち歩き　黒天子
楽譜見て唄へど半音すれて居り　けい子
読めもせぬ楽譜をかゝえ御通勤　愛論
楽譜にもない歌も出るのど自慢　雅巣
アクセサリーのつもりの楽譜をかゝえたり　栞
編曲は杆屋彌七と言う楽譜　潮花
御勉強ですか鞄は楽譜丈け　三四詩
新楽譜クル〳〵巻いて御堂筋　貴山
楽譜ならマ、に開けとは知らぬもし　雅巣
トライアングル楽譜めくつて一つ打ち　春巣
三味線も楽譜で二つ三つ弾け　路郎

兼題「銀行」　北川春巣選

銀行の夜は易者が軒を借り　銑児
学資ですかと銀行で顔なじみ　淡舟
失業ェブラットバンクの扉を押しぬ　六竜子
子供銀行父母を泣かせて繁昌し　悦子
銀行で借つているのが茶をよばれ　梅里
銀行の使い小便したくなり　文蝶
銀行は借つて貰うて礼廻り　馬洗
血液を買ふ銀行で飯がくえ　七面山
銀行に勤めて家は火の車　生々庵
銀行をこんなにむごいとこと知り　佳日夫
銀行え利子だけ残る貯金帳　嘉一
銀行は特賞附きでまだ集め　鮎美
銀行で髄抜けにあふイヤリング　幽王
銀行で髭の無力をさとらされ　香林
銀行の奥へ這入るは借りる肚　芒夢
風船が破けて銀行ドキッとし　三司
バンバンの街銀行は増築し　栞
銀行の昼合札の落ちた音　正司
銀行の利鞘は又もビルを建て　落帚
銀行で引出したとこ見つけられ　悦子
銀行を出るこゑんながスリに見え　三司
銀行の扉が重い金詰り　以兆
裏門へ預金不足のスクーター　梅志
銀行の守衛のつそりよつてくる　喜久堂
銀行へ行くを自慢のように云い　沐天
公金の外は用なきバンクにて　黒天子
横付けにして銀行は借り出され　へとち
億の付くマイナス銀行が潰させ　愛論
銀行でウロ〳〵とする当りくじ　同
銀行の使いへ月給思ふなり　ゆづる
千円の定期に暑中見舞が来　紫香
預金する銀行の戸は強くあけ　春巣
銀行につとめ役得たづねられ　紫香選

兼題「初恋」　黒川

初恋に破れ予備隊志願する　十九平
初恋の人は子を連れ子を背負ひ　鉄児
初恋を秘めて女教師無口なり　悦子
初恋のお好焼が渉らず　紅村
初恋にむしられて居る秋の草　文蝶
初恋の死は美しいものにする　潮花
初恋はまだ核心に触れていず　孝一
初恋はチャンスをものにせず帰り　牛歩
初恋は郵便ばかり気にして居　淡舟
おばあちゃんの初恋を笑ひ笑ひ　栞
初恋の文書き直し書き直し　馬洗
飛沫をあびて滝に並んだ初恋よ　鮎美
初恋とPTAでさし向い　千鶴
初恋の貴方を信じみかん剝く　翻骨
初恋はどちらも早目に来ては待ち　沐天
肺を病む人に初恋洩らされる　胡蝶
初恋を知つて日記が長くなり　ゆづる
初恋をこつそり姉に冷やかされ　紫香

席題「自殺」　福田妄夢選

抱き合つた死体へ子供不審がり　玲人
がや〳〵〳〵首吊りへ人だかり　愛論
思春期の娘あつさり自殺する　都詩子
海に浮く自殺くらげと流れ着き　鮎美
自殺に行くとは知らず早よう帰りや　牛歩
卒業写真自殺したのが前に居り　幽王
自殺してから小説のよく読まれ　ゆづる
つまらない噂女を死へ誘ひ　潮花
自殺する同志が会うて助け合い　悦子
又自殺らしい線路の人だかり　同
書置の日附と自殺の日が違ひ　喜久堂
自殺する勇気を嗤い生きている　扇子仙
奥さまに訊けば自殺の訳がなし　万楽
自殺しにゆく時間表貸してやり　貴山
自殺するわけをお医者はこり合はず　生々庵
自殺未遂それから恋がまた変り　紫香
今度こそ死ぬと書置かき直し　玲人
自殺する朝も植木に水をやり　文蝶

東京そばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店　大萬
★大万川柳（第二十回）を募る
兼題「新柄」路郎先生選
締切・十月十五日　句数五句以内
発表・十月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

自殺するつもりが月を見て帰り　妄夢

席題「恐妻」　西尾　栞選

打ちとけて話せば君も恐妻家　恒明
恐妻やおまへんワテは養子です　扇子仙
恐妻家同士仲よく飲みは飲み　貴山
奥さん恐かないのとダイビストに誘はれる　正司
パチンコで酔をさましゐ恐妻家　万楽
恐妻を看板にして金をため　三司
お隣りの恐妻ぶりを妻がほめ　生々庵
なあに家内ぐらいと恐れてゐ　牛歩
恐妻のくせにちよこ〳〵浮気もし　梅里
パチンコのそれさえ妻の眼を忍ぶ　わたる
恐妻で良し断るもなれたもの　嘉一
恐妻のある日テリヤにひとりごと　扇子仙
恐妻に夜勤〳〵の日が続き　玲人
恐妻で通り五人の父であり　ゆづる
酒の気がとれて女房こわいこと　愛論
恐妻は手土産だけはしかと持ち　淡舟
恐妻へ玉露の味が身につかず　梅志
恐妻家とは見えぬペン火の如し　いさを
恐妻と云ふも重役なればよし　三司
恐妻のフンフンきけばフエミニスト　栞

席題「大声」　長谷川三司選

大きな声で言えぬがあいつ首らしい　扇子仙
大声を出せば小声でたしなめる　梅里
大声も漸く止んだ午前二時　六竜子
生酔の大声さかり場の露路をぬけ　春柳
大声で妻に弱身をごまかす気　花村
大声を買われてメガホン持てと言ふ　落帚
大声が地声となつてもうけてる　胡蝶
長屋中聞える声で妻叱鳴り　水堂
船頭と船頭大きな声で過ぎ　紫香
大声は地声と妻の負けていず　正司
パンパンの大声愛の乾からびし　鮎美
大声にきびすを返すパトロール　玲人
大声で酔うて帰つた午前二時　淡舟
大声で呼べども夜の海静か　恒明
大声にマイクがちよつと面喰ひ　喜久堂
その声に痴漢大きくうろたえる　春巣
酒持つて来いと大声酔つてゐる　落帚
大声を出すなと夫婦喧嘩もめ　わたる
大声の父に車内の娘がてれる　香林
大声が地声となつた工場長　淡舟
大声で一人助けた交叉点　潮花
大声が聴衆二つに割る選挙　孝一
大声に驚きもせず毛虫ゐる　帆加夫
大声は命びろいに拝まれる　万楽
大声を出しても無駄と目をつむり　正司
酔うているから大声の出る男　恒明
本船を呼ぶ大声がこだまする　梅志
善人らしくあけっぱなしの声でした　古方
大声でどなつて淋しさだけ残り　幽王
大声で笑つて恋のない散歩　帆加夫
大声で何か云ひたい星月夜　三司

雑川　南大阪支部句会　（大阪市）

八月二十二日　於近映直営食堂

須崎　豆秋報

長襦袢今宵は誰にいだかれる　晴峯
長襦袢どなたどなたと起きてくる　豆秋
長襦袢あつさり脱いだ悲哀なり　幽王
再婚に仕立直した長襦袢　玲人
来客のベルに慌てる長襦袢　同
長襦袢二十の頃のままでいる　貞女
共白髪まで長襦袢着てはつた　古方
男とはこんなものなり長襦袢　妄夢
提灯がゆら〳〵子等のぼん踊　文蝶
辻斬へまづ提灯がやられたり　唯義
提灯の灯は消えたまま話し込み　恒明
提灯を出して本家の格を見せ　水堂
無理な字を書かされている提灯屋　同
提灯を配つて歩く地蔵盆　豆秋
提灯をさげて故郷の買い風呂　唯〳〵義
ろうそくを入れて提灯返しに来　梅志
提灯と妓が揺れている宜伝車　古方
みなが手を挙げるから挙げる多数決　豆秋
腰立は先に出来てる多数決　水堂
飲みに行く多数決ならすぐ決り　豆秋
多数決民意はそこに忘れられ　香林
幽霊でかまわん死んだ児化けてこい　幽王
幽霊になつても金のことを云ひ　香林
幽霊がロングスカートで出るならん　亜鈍
名人に時計掏られて感心し　豆秋
万策つき名人につこと駒を投げ　梅里
名も知れぬ露路に名人彫物師　唯義
月賦でもよいと名人こだはらず　香林
名人と一字違いの旅芝居　水堂
名人の気性が記者を手古摺らせ　勢三
名人の世事にはうとき身の廻り　葉光
名人が明日〳〵を不安がり　文蝶
名人は西へいこうが金詰り　亜鈍
煽風機ほしい〳〵で夏が過ぎ　梅里
煽風機角度が違ひ見送られ　いわを
祖母一人反対している煽風機　文蝶

雑川　出雲支部句会　（出雲市）

八月十日　於武田十六居

森山　壮報

貯めたそな建てたそうなで転宅し　まさる
もう稲が秋を囁いてゐる残暑　同
移転先貼つて名残りの窓を閉め　代仕男
親だけが聞いてやつてる負け惜み　峯雲
仲裁に委せてからも減らぬ口　緑之助
生きる途もあつた意見に涙上げる　同

雑川　下関支部句会　（下関市）

七月二十六日　於下関駅

石川　侃流報

夏の夜の恋は二人で歩くだけ　侃流
踊の輪くづれて残る影二つ　九呂平
夏痩え故郷から届く鰻桶　半休門

風流珍味　お好み焼
たいこばし
住吉公園下車東出口
東ノ辻北へ入ル
★さゝやかな商売を始めました
何卒ごひいきに　幽王

昼食はうなどんのある駅ときめ　藤市
納涼に疲れて帰る子沢山　半休門
涼しさも売値にこめた別荘地　蘇人
夕立が過ぎて風鈴繁く鳴り　土筆坊
保安庁汗の上衣のいかめしい　藤市
夏服は胸をあらわにニュールック　みつる
蚊やり火をたいて野良への夫を待ち　土筆坊
夏服を脱がされ旅の客となり　司楼
夏服も冬服もつい鉄道員　忠朗

雑川　岡山支部句会　（岡山市）

七月二十日　於山陽旅館

藤本　満年報

親の目に少し気になる娘の勝気　格一
口許に勝気な色をツンと見せ　湖月
大学を出たのは姉の勝気から　方大
勝気なを利用されてる寄附の額　ペン郎
末つ子の勝気へ母は望かけ　十九平
女手に八段五畝という勝気　忠美
名をなして母の勝気を拝むなり　満年
適令はとつくに過ぎている勝気　久米雄
水平線空母一隻点にする　方大
水平線入道雲のわくところ　大甲帽
ニツポンが近いぞ水平線に富士　美婦適
水平線見えて登山は一服し　美能留
水平線斜になつて着陸し　恵二朗

真夜中の電報家内中が起き　十九平
出まかせが念を押されて吃り出し　笑児
出まかせの文句へ土工節をつけ　大甲帽
大欠伸して年頃は叱られる　格一
半生は線香花火のように過ぎ　恵二朗
音がして花火へ下駄をつゝかけ　満年
母さんも家で見ていたいゝ花火　久米雄
角帽をにぎりつぶした応援歌　同

雑川　**小郡支部句会**　（山口県）

子と並ぶ夫へうちわの風をやり　長野井蛙報
お土産の欲しさに父をうちわ攻め　一幸峰秀
釣れ出した岩に夕日は沈みかけ　井蛙
雷へもうボート屋の早仕舞　柳虹
子が出来て脊広をつくる気が変り　同
似合うと云はれ首吊りこも云えず　一幸

雑川　**京都支部句会**　（京都市）
八月十六日　於仲源寺

そばかすの魅力となつた白い肌　村松晴芽
そばかすも愛嬌として女将生き　夢裡報
そばかすをかくさず孫と余念なし　案生子
そばかすの女瞳を撒いてやめ　キヨ
うたたねえよい風鈴のなる隣　紅寿
うたたねの団扇は持つていたのなり　紫蘭
猫の子が転寝の娘の足に寝る　司郎
転寝の生活に耐へた妻の頬　好浪
逆境へ太つてくれる猫がいる　いくを
逆境へよき友がありよき手紙　みてい
夜雨頻り逆境にある口を噛む　紅寿
逆境へ信じてくれる妻があり　夢裡
逆境の眼に山河あり胸を張る　和朗
逆境の夫婦人から遠ざかる　草之助
善人の弱さを押され〳〵生き　豊次
月は二人え古畳でも　紫蘭
畳数へてまだ広く見へ　蘇海
借家なり上敷でも買はう　子猿
畳が足へ告げる初秋迷々　案生子

川柳雑誌社ハワイ支部　**ウイロー社句會**　（ハワイ）

同情の行きすぎ果ては疑はれ　暁舟
叱られる兄へ妹涙ぐみ　亭駒
同情はするが然しで断らそ　快夢起
同情を何時かお金に換算し　細民
同情が男になれと貸して呉れ　草一郎
同情もされず大家は焼け出され　馬喜々
安なさけ家中すこくもめにもめ　照子女
同情がどこまで妻を悪く云ふ　笑有
同情はしても貸すとは云はぬなり　麿花麗
裏うちのある同情とあとで知り　大彦
同情をすれば猜疑の目で見られ　柳葉
同情を分けて気の合ふ娘同志　さゝみ女
同情はするが無い袖振れもせず　常夏
名も告げぬ後姿を伏し拝み　木公

雑川　**貴生川支部句会**　（滋賀県）
七月二十六日　於町役場階上

恥しい生理休暇に許可が要り　紅月
休暇とる嘘を知つてる廻り椅子　斗志
生理休暇とつて来たのも居るキャンプ　美秋報
年休を流して無事な日を送り　春巣
山へ来てこんなにうまいたばの水　紅月
山彦へ笠置じつ子の声を出し　美秋
うつむいただけでわかつた娘の返事　文子
農繁期だつたとおそい返事来る　春巣
夕涼み母は花火の火付役　凡骨
早打が終り一呼吸して話し　木人
外人のなにがおかしい高笑い　美秋
生ビール飲む楽しみの汗をかき　春巣

七月十一日　於役場二階

涼み台みんな浴衣の値にふれる　観月
指名犯浴衣のまゝで捕えられ　夢生
亡き父の浴衣短かく成人し　昇棋
雨の日の招待着替え別に持ち　みよ子
招かれてライバルらしい人に会ひ　文子
金庫の前にゐる重役は高がしれ　一彦

雑川　**大聖寺支部句會**　（石川県）
八月九日　於佐分利明石居

野村味平報

片言が思ひ出される一周忌　義雄
片言へあれこれ好み聞いてやり　味平
恋人に出逢へば子供背負つてる　とよ
妻のミシン風鈴の音を消し　魯木
別れてからやつと気のつく人違い　笑平
子の花火親も見ている夏座敷　光郎
片言へ母は通訳して笑ひ　桃園

浜寺病院川柳句會　（大阪府）
善所　新三

先生の野良着に換えた日曜日　十三呂
挨拶へ先生軽く帽子取り　漫多郎
恩師との誓も空しく肺を病み　溪泉
先生に治ると言われ治つた気　浜小
教へ子の店で先生安く飲み　晃三
校長にもなれず停年近くなり　大根
校長のフロックコート色あせて　小雀
金槌は浅い処で子と遊び　溪泉
先生と言われて青春素通りし　狂一
苦節三十年校長と言ふ名に変り　石三
新任の教師の渾名じきに附き　芳洲
復古調先生論語の廛払ひ　眉山
海の子が目指す五輪え鍛え上げ　同
Z旗が又出て来そう日本海　大根
鐘の音は船の別れをそゝるやう　月皎
店頭の水着姿が海え呼び　文茶
讃美歌の口笛で来る朝の海　諷士
ゆで玉子の店も出ている海地獄　新三

南区医師会　**川柳同好會**　（大阪市）

初孫がひとり舞台でお座を持ち　迷路
声自慢一人舞台のつもりなり　烏耕
咳一つする人もなし鏡獅子　珊枝郎
女座主バッタ〳〵と斬り倒し　弾正
紅一点さほど美人ぢやなけれども　比呂史
ひとり舞台さばかれて居ることは知らず　生々庵
ひとり舞台委しときなと酔ひつぶれ　同
ひとり舞台の心算供託金まで取られ　無名林
かつぎ屋は終電をひとり舞台にし　瑞川
議会報告一人舞台の様に云ひ　太希志
一幕はひとり舞台を出す座長　捨舟
街路樹のかげでラッキーセブン聞き　無名林
炎天に草採る姿有難し　迷路
ソワ〳〵ニヤ〳〵人待顔の朝の駅　太希志
待人は来ず終電の響くこと　無名林
どこへ寄つて来たのと待人やかれて　瑞川
千秋の思ひで待つは親馬鹿か　一哲
キットよと云はれ待つてる男なり　同
待ちぼうけ最後の煙草たたきつけ　比呂史
待ち合はす人にも夕刊買うて待ち　生々庵
四時間も待たせてやつと来ぬ報らせ　捨舟
待ち人が来そうにもない雨となり　弾正
喫茶店コーヒーだけで待つ気なり　同
未帰還へせめてと声を送る妻　とし代
待人もしたが今夜もお茶を挽き　珊枝郎

阪田謄写版
大阪市北区芝田町二五
株式会社　阪田商会
電話　福島五一三六
番　九九五一番

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰東へ半丁浜側
電話南㊱三二四六

編輯局にて

★今年はいつまでも暑かつたが、朝夕は大変凌ぎよくなつた。本号の出る頃には、よほど作句の秋らしくなるであろう。★本号の表紙も二科の米田三男之介画伯を煩わした。表紙画としての妙味を発揮されたので味つていただきたい★前号の「円座句評」が好評だつたのでメンバーを少しく変更して「円座句評」を続けることにした。好評を乞う。★福田山雨楼氏の「川柳大学」はいよ〳〵川柳の本質を講述、病臥中の力作である。他誌の追随をゆるさないもの味読されたい★東野大八氏はジャーナリストの本領を発揮して、大野伴睦氏の「三日議長の俳句」を寄せられ、俳句と川柳のケジメを簡単に述べられた★かねて予告していた物故川柳人慰霊句会を愈々十一月一日に開くことにした。会場の光明寺は静かな寺でもあるし座敷もゆつたりしているので、川柳に絵を配した行燈を多数飾付け、遺墨も陳べ斯うした会にふさわしい雰囲気を作りたいと思つている。万障を繰合せて参加されたい。★POE（一歩）が八月から近畿ノーベルフォンに就職したので、梨里（リリ）が又編輯を担当することになつた。馴れた仕事なのでまごつきはしないが、何分長時間の激務なので健康だけが問題である。しかし弟を安心させるためにもハリキツテいるから心配することはないだろう。前号からが梨里の編輯である★八月下旬から編輯部の陣容を拡充するために、不朽洞会員の没食子・春巣・潮花の三君が編輯に参加毎木曜の夜に部会を社で開催することにした。今後いろんな企画が実現して更に内容が充実することと思う。大いに期待していただきたい。部外からの企画やベンタツもあるので編輯部としても懸命の努力を続けようと申合せている★部会はいつも朗らかだ。暑い〳〵とランニングシャツ一枚の主幹に調子を合せる歟でもあるまいが編輯長はシュミーズ一枚に向う八巻、酒のむな酒のむなの鼻唄交じの編輯ぶり、★無口の没食子は一杯きこしめ、雄弁症にかかると頼まれないでも座談会の名司会者になるし★謹言居士の春巣も、ツイ釣込まれて、座談会の筆記ならと、大学時代の腕前を発揮する★小粒で賑やかな潮花はガヤ〳〵シャベリながらも回覧句評の製作に汗を流している★万年少女の覆乃は編輯室と炊事室との間を往つたり来たりで忙しく、そして二匹の猫は縁側へ締出されている。

（路）

不朽洞会から

▼池沢原治郎（楽居）先生（大阪市）は九月三日午後四時から中央電気倶楽部で「第三文明の胎動（心霊科学）と乗遅れの宗教」を講話された▼石曾根民郎氏（松本市）は「現代川柳展望—自選川柳年刊句集改題」を編纂刊行された。川柳作家八百余人の自選十句集成で作家の住所及生年月日を附し、附録として全国主要川柳雑誌一覧表が添えられてあるA5判四二〇頁、価四〇〇円〒五〇円▼清水白柳子氏（大阪市）は杉原大研子三回忌に当り故人を偲ぶ「ひまわりを」刊行、句会出席者に頒たれた▼種瓜平氏は諷刺とユーモア紙「大阪パンチ」を九月に創刊された発行所は大阪市北区真砂町三三大阪パンチ社定価一部十円▼福田妄夢居に電話が開通した電話天下茶屋㊻五六二三番▼麻生POE氏は七月三十一日夜行で東上所用を果し、八月十五日に木村孤浪氏に面会石膏像を手渡し神明下の「神田川」へ案内され歓談、その夜の列車で帰阪▼水谷竹荘氏（大阪市）は所用で東上、八月十五日附の来信によると富士野鞍馬氏を訪問された由▼山本葉光居に電話天下茶屋㊻四〇〇八番が開通▼狩野燕子氏（姫路市）は三月から山陽電気の神戸の本社へ転勤され八月末には友人と大和アルプスを縦走された由▼木下幽王氏は風流珍味お好み焼の店「たいこばし」を（住吉公園駅下車東出口東ノ辻北へ入ル）十月一日から開業される▼戸田古方氏（池田市）が担当される大阪市成人学校（大阪市教育委員会主催）の川柳初歩講座は九月三十日（火）から週一回天王寺中学で開校されることになつた。十回で修了▼浪玲之介、武部香林の両氏は都合上九月から会員種別を正会員に変更された。

新会員紹介

九月

中山中納言（香川県）正　風来子氏推薦
臼井三林坊（岡山県）正　満年氏推薦
安部寛子（香川県）正　風来子氏推薦

十月

青柳扇子仙（大阪府）正　潮花氏推薦

物故川柳人慰霊句会

私達は川柳することによつて真に生甲斐を感じて来たが長い川柳生活に於て多くの同志を喪つた悲しみを忘れる事が出来ない。そして今もなお故人の姿が髣髴として瞼に迫り、追憶の情忍び難いものがあるので茲に故人の慰霊句会を開催し遺墨其他を展観する事にした。初心の方々も来り会し、この機に物故川柳人の面影を偲んで頂きたい。

日時　十一月一日（土）午後五時半
会場　光明寺　大阪市天王寺区下寺町二丁目
挨拶　不朽洞会理事長　中島生々庵
兼題　遺産（路郎選）遠縁（緑雨選）夢枕（鮎美選）（各五句）
席題　当日発表
　過去帖朗読　不朽洞会常任理事　西尾栞
　読経・焼香
柳話　物故川柳人を語る　麻生路郎
披講　席題・兼題・呈賞不朽洞賞（路郎選天位）各題天位
会費　五〇円　記念撮影
投句の方は締切　十月廿三日限葉便会費（三〇円同封本社宛）投句は一句宛句箋に記し裏面に題と雅号明記

主催　川柳雑誌社

川柳不朽洞會

指導　麻生路郎

賛助　池沢楽居　長谷川一徹　長野晴浜　藤村作　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　藤村雅光　田中辰二　岩崎愛二

洞友　鳥山一歩　沖野岩三郎　亀井晨修　田村孝之介　山本雨迷　安川久留美　山路閑古　前田伍健　柴谷宰二郎　麻生葭乃　橋本緑雨　高鷲亜鈍　沢田四郎作　東野大八

不朽洞會員（特別會員）

中島生々庵　奥村丹路　戸倉普天　上田翠光　北川春巣

（維持會員）

木村孤浪　福田山雨楼　寺井鋭々　戸田古方　前山北海　古川魔花麗　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　村松夢裡　大坂形水　藤岡至芸瑠　井上湧三　北林松代　川村好郎　築山快夢　西尾栞　永田里十九　高田抱逸　小田沙兆　市岡暁舟　三鴨美笑　林盆丘　白砂旋風

（正會員）

市場没食子　吉田水車　大西八歩　須崎豆秋　石曾根民郎　正本水客　黒川紫香　丸尾潮花　土井文蝶　野本呑水　山口秋花　吉田斜水　藤本満年　西口如川　姫田夕鐘　福島鉄児　直原湖月　黒田久米女　藤本茶々　塩浜一路　谷内一草　福本翩骨　布村南扇子　榎南夏六　田中遊星　西いわを　高山朗笑　杉山一貫　水田千石　中村たゞみ　山本葉光　東喜久堂　鈴木天貧　木村千容　田垣方大　那谷光郎　野村昧平　木村水堂　膳所新三　花岡英子　八木摩天郎　福田丁路　水谷谷水　佐々木告天子　楢原一善　田村藤波　峯尾魚々　岡田夜潮　中谷仙坊　坂井三葉　政田大介　中山中納言　臼井三林坊　青柳扇子　安倍寛子　石井白面人　布施筑川　尾崎方正　桜川不水　浜田久米雄　好崎申仙　菊沢小松園　逸見灯竿　清水白柳子　鈴木九坡　夷一笑　小川恒明　浪玲之介　徳永雅美　武部香林　大森風来子　岡島嶺泉　中島鉄洲　新川博也　尼緑之助　水谷竹荘　小橋隆如　吉田圭井堂　弘津柳慶　杉谷湖山　増田耕民　国弘半休門　佐野卜占　小沢史葉　田代尋四　河村日満子　西森花村　石岡正司　狩野燕子　上林粗影　黒田笑泉　直原七面山　丸山弓削平　松江梅里　松井可笑　岸南柳　太田良子　森下愛論　友淵貴山　上田春柳　服部十九平　大森娯句楽　長谷川三司　荒木哲水　山中志乃布　桑原養痴園　成瀬月仙　若林草右　足立春雄　中村五酔　有働芳仙　大西迷窓　延永忠美　地倶山風楼　浜畑胡蝶　阿形一杉　坂田良坊　石川侃流　大森苑女　安岡珊枝郎　長谷川迷路　南捨舟　黒木弾正　牟田一哲　河村瑞川　木村無名林　田中鳥耕　藤原虚水　益永貞女　大倉四案　山田季賛　山田鳥荘　水本無盡　水田千石　中村たゞみ　山本葉光　東喜久堂　鈴木天貧　木村千容　田垣方大　那谷光郎　野村昧平　木村水堂　膳所新三　花岡英子　八木摩天郎　福田丁路　水谷谷水　佐々木告天子　楢原一善　田村藤波　峯尾魚々　岡田夜潮　中谷仙坊　坂井三葉　政田大介　中山中納言　臼井三林坊　青柳扇子　安倍寛子　石井白面人　布施筑川　尾崎方正　桜川不水　浜田久米雄　好崎申仙　菊沢小松園　逸見灯竿　清水白柳子　鈴木九坡　夷一笑　小川恒明　浪玲之介　徳永雅美　武部香林　大森風来子　岡島嶺泉　中島鉄洲　新川博也　尼緑之助　水谷竹荘　小橋隆如　吉田圭井堂　弘津柳慶　杉谷湖山　増田耕民　国弘半休門　佐野卜占　小沢史葉　田代尋四　河村日満子　西森花村　石岡正司　狩野燕子　上林粗影　黒田笑泉　直原七面山　丸山弓削平　松江梅里　松井可笑　岸南柳　太田良子　森下愛論　友淵貴山　上田春柳　服部十九平　大森娯句楽　長谷川三司　荒木哲水　山中志乃布　桑原養痴園　成瀬月仙　若林草右　足立春雄　中村五酔　有働芳仙　大西迷窓　延永忠美　地倶山風楼　浜畑胡蝶　阿形一杉　坂田良坊　石川侃流　大森苑女　安岡珊枝郎　長谷川迷路　南捨舟　黒木弾正

募集

課題吟募集

後姿（十句）市場没食子選
三等重役（十句）藤本満年選（十月廿日締切）
炬燵（十句）浜田久米雄選
猫（十句）黒川紫香選（十一月廿日締切）

毎号募集

近作柳樽雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第七卷　第十号

定価　四〇円
送料（四円）

（禁転載）

半ヶ年概算　二六四円
一ヶ年概算　五二八円

昭和廿七年九月廿五日印刷
昭和廿七年十月一日発行

大阪市住吉区内方代四五丁目二五番地
印刷兼発行人　麻生幸二郎

大阪市住吉区内方代四五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪　七五〇五〇

昭和廿七年一月廿日第三種郵便物認可　（毎月一回一日発行）　昭和廿七年九月廿五日印刷納本　昭和廿七年十月一日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・305

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

避妊には…
ゼリー剤を！
★溶ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で深部へ送るか、タンポンに塗り御使用を！
サンシーゼリー
山之内
1極 2太郎 3サンシー

もっと速く　もっと便利に…
とのご期待に應
名古屋ー大阪 特急2時間
名古屋発八・三〇　一三・三〇　一六・三〇
大阪上六発十・三〇　一二・三〇　一六・三〇
急行ねとのほか60分ごと運行
近畿日本鉄道

アイスクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で
酒販用紙コップ食堂用紙製品一切
特殊紙器工業株式會社
フタバカップ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋(66) 2802 2803

大阪と小阪と
食料品店仲在之介
秋旬の
海苔の佃煮
磯ずいまん

第三〇五號　川柳雜誌　定價四拾圓　送料拾四円